

阪神淡路大震災の記憶の継承

－「伝える」意味と次世代への継承－

学籍番号	1476514C
氏名	井上 佳奈子
専攻分野	地域文化論講座 アジア・太平洋文化論コー ス
指導教員	窪田 幸子 教授
副指導教員	貞好 康志 教授

平成 29 年 12 月 18 日 提出

卒業論文題目：阪神淡路大震災の記憶の継承 – 「伝える」意味と次世代への継承 –

国際文化学部 地域文化論講座 1476514c 井上佳奈子

指導教員：窪田幸子 教授

<目次>

序章 研究の目的、背景	-2
第一章 震災の記憶の継承とは	-3
第1節 意義	-3
第2節 被災者・市民が担う役割	-5
第二章 人と防災未来センターの語り部	-6
第1節 人と防災未来センターの沿革	-6
第2節 語り部の「語り」の内容とインタビュー結果の考察	-7
第3節 語りの比較による分析と課題点	-24
第三章 さまざまな形での「継承」と若者の参画	-29
第1節 語り継ぐ以外の方法で震災の記憶を「継承」する	-29
第2節 課題点と展望	-34
終章 まとめと結論	-36
参考文献リスト	-40

序章 研究の目的と背景

(1)研究の目的

本論文では、阪神淡路大震災の記憶や経験を後世に受け継いでいこうとする活動に関して、語り部による継承や参加型のイベントを例に取り上げながら考察する。震災の記憶を継承しようと活動している人々が、伝えようとしていることは何なのか、どういった方法でそれを伝えようとしているのかということ、インタビューや先行論文の検討をもとに分析する。また、阪神淡路大震災の発生から22年という月日の経過や、原爆体験の継承との比較も踏まえたうえで、阪神淡路大震災の記憶や経験を継承することの意義、そしてそれらの活動の課題点や展望を明らかにしていくことを目的とする。

(2)研究の背景

1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災から22年以上の月日が経過し、その後2011年には東日本大震災、2016年には熊本地震と、日本各地で相次いで大きな地震が発生した。22年という月日が経過したのちも、1月17日の新聞には「忘れない」「伝えたい」といった言葉が並ぶ¹。阪神淡路大震災の記憶が薄れ経験者は減少する一方、だからこそ震災の記憶を後世に受け継ぐという活動は、いっそう強化しなければならないという意識があるように見受けられる。

しかしながら、なぜ震災の記憶や経験を受け継がなければならないのか、受け継ごうとする人たちはどんな風に何を伝えようとしているのか、ということについて、上記の記事で深く言及されているわけではない。記事で軽く触れられている内容としては、「阪神・淡路の教訓を伝える」「故郷の風景を失った人がいることを伝える」ことなどが挙げられているが、震災の記憶を継承するという行為の目的や意義は多様な側面を持つと考えられる。

例えば、近年重要視されつつある防災教育²の観点から考えると、日本では阪神淡路大震

¹ 神戸新聞 NEXT 「忘れない淡路島の1・17 野島断層保存館で特別展示」(2015/1/17 付)

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/201501/0007663168.shtml>

「忘れない、東京でも 「阪神・淡路」写真展を開催」(2015/1/17 付)<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/201501/0007665063.shtml>

「震災の教訓、次世代へ伝えたい 神戸大で追悼式典」(2017/1/17 付)<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/22/201701/0009838356.shtml> (2017/12/3 閲覧)

² 神戸新聞 (2015/8/18 付) 「復興 次代へ」より、東日本大震災以降、学校教育において「防災」科目の必修化の議論がおり、検討中にとどまっているものの、指導要領では各教科で防災関連の指導内容に触れるなど防災教育の推進に触れている (2017/12/3 閲覧)

災に続いて東日本大震災、熊本地震など大きな地震が多発しており、近い将来には南海トラフ地震が発生することが予想されていることから、過去の震災の経験を未来に生かす営みは重要性が高いといえる。そして、事前の防災・減災や災害時の対応をうまく機能させるためには、政府や行政がとるべき措置や対策も当然重要ではあるが、個々人の防災や地域コミュニティでの連携が不可欠であると指摘されている。そのため、震災を経験した語り部による記憶や経験の継承や、地域における震災・防災関連のイベントが重要な役割を持つと考えられる。

このような防災教育的側面も含め、震災の記憶を継承することの意義や目的とはいったいどのようなものなのか、実際に「震災の記憶の継承」に意欲的に取り組んでいる方々へのインタビューをもとに考察・分析することは、これからの「震災の記憶の継承」の向かうべき方向性を考えるうえでも有意義だと考える。

また、「震災の記憶の継承」にさまざまな意義があるとすれば、次に問題となるのは震災の記憶や教訓の「風化」である。震災の経験や記憶は常に「風化」と隣り合わせであり、時間が経過するにつれ、「忘れない」という言葉とともに「風化させてはいけない」と叫ばれることが多い。時間の経過によって震災の記憶を生々しく共有できる人の数が減り、ある程度薄れてしまうことはやむを得ないことではあるが、過去の記憶を未来に生かし震災を経験したことのない世代にも受け継ぐためにはどうすればよいのか。また、どのような方法で震災を経験していない人々に主体的に関わってもらうのか。本論文では記憶の継承活動の中でも語りによる伝承活動や参加型の震災関連のイベントに着目し、その意義や特徴、課題点や展望を考察することで、その糸口を探っていきたいと考える。

第一章 震災の記憶の継承とは

第1節 意義

「震災の記憶や経験を風化させてはいけない」、「後世に語り継がなければならない」、という語りは、震災後22年となった神戸でしばしば聞かれるものである。そして、このことは多くの人が重要だと考えていることだといえるだろう。この論文では、阪神淡路大震災の記憶や経験について、なぜ語り継いでいく必要があるのかということに改めて考えてみたい。そもそも、震災の記憶や経験を継承する活動とはどのような位置づけなのだろうか。ここではおもに先行論文をもとに整理していきたい。

村井(2008)は、災害発生から次なる災害の発生まで何をすべきかという減災サイクル³を作成している。それによると、災害発生→応急対応→復旧・復興→被害抑止・軽減というサ

³村井正清(2008)「「なんでもありや!」としてのボランティア」岩崎信彦、田中泰雄、林勲男、村井雅清編『災害と共に生きる文化と教育 <大震災>からの伝言』昭和堂、p.30

イクルが考えられるという。このうち、記憶を継承する活動を位置づけるとすれば、被害抑止・軽減のところで活動と考えられる。被害抑止・軽減にあたる活動にはさまざまなものが考えうるが、「語りつぐこと」というのは、政府・行政が担う災害対策やシステムの構築といった側面とは異なり、地域コミュニティや住民などの間で共有すべき知恵の伝承や防災意識の向上などに寄与する活動であるといえる。

この地域や個人レベルでの災害への対応というものが、重要視されつつある。岩崎(2008)は、都市環境の飛躍的な発展とともに、防災は専門機関や行政機関が担うものだという風潮が強まり、住民自身の災害に対する武装を解除させてしまったことを指摘している⁴。

しかしながら、阪神淡路大震災において住民自身の備えや地域コミュニティの連携が重要であることが再認識されるとともに、従来の災害そのものを防ぐ「防災」という考え方から、災害そのものを防ぐことはできないが被害を軽減することを目指す「減災」という考え方に変化しつつある。また渥美(2014)によれば、この「減災」という言葉には、専門家の考えを参考にしながらも人々が自分なりに震災に対応するために取り組むという姿勢が含有されている⁵。以上のことから、震災の記憶や経験を継承する活動は、個人や地域レベルで災害への対応や減災の取り組みを促進する上において意義深いといえる。

つまり、防災・減災の観点からとらえれば、「語り継ぐこと」は地域・個人レベルでの防災意識の向上や、地震の被害を少なくするためにどうすればいいかというような教訓の継承であるといえる。

それでは、教訓を受け継ぐといった減災・防災の観点以外で、「震災の記憶の継承」はどのような意義を有するだろうか。桜井(2008)は、被差別や被害の経験の継承について「記憶の場であれ所属集団やコミュニティであれ、人びとのアイデンティティを形成するには、他者と共有できる集合的記憶の枠組みが必要であり、同時に、自己をこえた世代の連続性が求められるということであろう。」⁶と述べている。被差別の経験はその集団のアイデンティティに直結するため、記憶を継承し集合的記憶を形成することへの要請はより強いと思われる。だがこれは、阪神淡路大震災を経験した神戸にもある程度当てはまるものではないだろうか。第二章で詳しく言及するが、震災の記憶の継承を実践している語り部の方の中には、復興してきれいになった神戸の街がどのような苦労を経てきたのかを知ってほしいと話す人がいた。また神戸では、阪神淡路大震災の犠牲者を鎮魂するとともに復興のシンボルとして毎年開催される神戸ルミナリエや、第三章で言及する追悼式典「1.17のつどい」など、震災の記憶を思い起こすイベントが現在でも盛んに開催されている。このような機会に

⁴ 岩崎信彦(2008)「「災害文化」と「災害教育」を考える」岩崎信彦、田中泰雄、林勲男、村井雅清編『災害と共に生きる文化と教育 <大震災>からの伝言』昭和堂、p.5

⁵ 渥美公秀(2014)『災害ボランティア 新しい社会へのグループ・ダイナミクス』弘文堂、pp.213-215

⁶ 桜井厚(2008)「語り継ぐとは」桜井厚、山田富秋、藤井泰編『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』せりか書房、pp.14-16

触れることで、神戸に暮らす人々は「神戸は震災を経験し乗り越えてきた街である」ということをふと思い起こし、アイデンティティとして共有しているのではないかと考えられる。語り継ぐことや震災関連イベントによる「震災の記憶の継承」は、そのような神戸のアイデンティティを形成し、持続させていくためにも機能しているといえるのではないだろうか。

また桜井は戦争体験や被差別の経験の継承について「語り継ぐ行為は過去を歴史へと固定化することではなく常に現在へと再活性化することであることを忘れてはならないだろう」⁷と指摘している。阪神淡路大震災の記憶を継承する活動の目的も、震災の記憶や経験を歴史的な事実として伝えるというより、常に現在の状況や伝えられる相手側を意識しながら継承していくことが重要だという点では同じであろう。第二章で紹介する語り部の方々も、相手の防災知識の程度や、若者かそうでないかを意識したうえで語る姿勢が見受けられた。

第2節 被災者・市民が担う役割

本論文で取り上げる震災の記憶の継承や語り継ぐ行為は、被災者や市民が活動の中心を担っているという点が重要である。例えば、メディアも震災を伝える役割を果たしているが、長坂(2012)は東日本大震災の復興を伝えるメディアの報道について、メディアはイベント当日の瞬間を切り取って報道する傾向にあるが、その準備段階や準備過程における地域の協力関係などについては通常報道されないことを指摘している⁸。つまり、メディアは視覚的に分かりやすく素早く情報を伝える点では優れているが、被災者や市民による「生の声」は、そうしたメディアが取りこぼしがちなさまざまな過程や舞台裏の部分を伝えることができる点で意義が認められるのではないかと考えられる。

また、語り手が市民であるということは、語りを聞く市民との距離も近く、気軽に話を聞いたりイベントに参加したりすることが可能であり、対等な対場でコミュニケーションをおこなえることから、個人、地域レベルでの減災への取り組みを活性化させるうえで効果的だといえる。知識豊富な災害の専門家や学者の講話を聴くことも重要ではあるが、機会が限られていることや、シンポジウムなどの場ではどうしても一方的な講演になることが多い点が課題として挙げられるだろう。記憶の継承の担い手が市民であるということは、参加のハードルが低く気軽に減災を考える契機が多くなり、地域の防災・減災などに関してコミュニケーションが生まれる可能性がある点でも意義があると考えられる。

防災・減災の観点からみれば、震災の記憶や経験を伝承する活動が必ずしも備えの実施につながらないという指摘もある。島、片田、木村(2010)によれば、阪神淡路大震災の被災都市神戸と、被災していない横浜とで震災の伝承や備えに関するアンケート調査を行ったと

⁷同上、p.16

⁸長坂俊成(2012)『記憶と記録 311 まるごとアーカイブス』岩波書店

ころ、大震災に関する伝聞の頻度は明らかに神戸の方が高いものの、大震災への事前の具体的な備えの程度についてはあまり差がないということが報告されている。ただ一方で、大震災について不安に思う意識や備えの実施意向等は神戸の方が割合が大きい⁹。この報告からみると、被災都市神戸においては身近な人から被災体験を聞く頻度が高く、被災していない都市の人々と比較すると震災の恐ろしさなどが精神的に強く刻み込まれ、震災や防災に関する気持ちや意識は高まるが、そこから具体的な備えや地域防災活動への参加へは至っていないということである。

身近な人から震災の話聞くことが必ずしも防災・減災に直結しないことはふまえておく必要があるが、第二章で紹介する「人と防災未来センター」の語り部の方々の中には、体験談を話すにとどまらず、豊富な知識やデータをもとに震災の話をする方や、より実践的な形で震災の経験を活かし若者へ継承しようと活動している方もいれば、自らの語りによって聞き手が防災意識を高めることを必ずしも志向しているわけではない方もいる。語り部ボランティアの方は元県庁職員や元消防職員、元会社員、専業主婦などさまざまなバックグラウンドをお持ちであり、そこから生まれる多様な語りの魅力の一つである。

そこで第二章では、「人と防災未来センター」の語り部の方がそれぞれどのような背景を持ち、どのような目的をもって語り部として活動されているのか、伝えたいことは何なのかといったことをインタビューをもとに考察し、語りの特徴や「震災の記憶の継承」の意義について分析していきたいと考える。

第二章 人と防災未来センターの語り部

第1節 人と防災未来センターの沿革

現在の「阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター」（以下、人と防災未来センター）設立の契機は、まず1995年10月に政府の「阪神・淡路復興委員会」が復興特定事業の一環として、阪神・淡路大震災記念プロジェクトを提言したことにある。そこから、国、県、神戸市、民間で同プロジェクトの検討委員会が設置され、その後設置された財団法人の阪

⁹島晃一、片田敏孝、木村さやか(2010)「被災経験の風化と災害文化の定着過程に関する一考察。」『土木計画学研究/講演集』41:320より、平成21年度におこなわれた神戸と横浜の中学三年生と成人を対象としたアンケート調査にて、以下のような結果が得られたことが述べられている。「阪神淡路大震災のことを、最近、人から聞いたか」という伝承の頻度を問う質問では、神戸の方が横浜より伝承の頻度が明らかに高かった。ただ、「大震災への事前の備え」を実施しているかいくつかの項目に分けて質問した結果、有意な地域差は得られなかった。一方、「地震への備えについての日頃の考え」に関する自由回答の集計結果では、地震を不安に思う意識や大震災への備えの実施意向などの項目において神戸が横浜を大きく上回った。

神・淡路大震災記念協会が1999年5月26日に基本構想を発表した。さらに6月には行政・有識者などによる「阪神・淡路大震災メモリアルセンター構想推進協議会」が設置され、「阪神・淡路大震災メモリアルセンター整備構想」を策定した。そして2001年1月に現在の人と防災未来センターの西館にあたる「防災未来館」の建設工事に着工し、2002年3月末に完成した。また、2003年3月末には現在の東館にあたる「ひと未来館」が完成した。2010年1月にそれぞれ西館と東館に名称を変更し、両館を合わせて「人と防災未来センター」として再オープンした。

平成28年度の年間利用者数は504,410人であり、有料展示プログラム利用者のうち「団体予約」「個人」別では「団体予約」が66.4%、年代別の「大人」「高校・大学生」「小・中学生等」別では「小・中学生等」が51.3%、「高校・大学生」も含めると62.1%となっており、学生、とりわけ小・中学生の団体利用者が多いことが分かる。

また、人と防災未来センターは職員のほか多数の運営ボランティアにより運営されている。運営ボランティアには、語学、手話、展示解説、語り部の四種類があり、1人週1-2回、毎日25人程度が活動を行っている。運営ボランティアのうち語り部の登録者は平成28年度末で43人であり、その内訳は男性27人女性16人、年代別では40代1人、50代1人、60代10人、70代16人、80代以上が15人となっている。語り部は主にセンター西館1階のガイダンスルームで団体予約客に向けて講話を実施しており、平成28年度の年間講話回数は1,073回、聴講人数は58,462人となっている。また、同じく西館3階の震災資料や被災者の遺品を展示している震災の記憶フロアにて、展示の案内や誘導を行っている。¹⁰

第2節 語り部の「語り」の内容とインタビュー結果の考察

(1) 概要

人と防災未来センターでの語り部ボランティアによる講話は、震災の記憶を継承する活動の代表例といえる。そこで筆者は、語り部ボランティアをされている方がどういった意識や思いで語り部をしているのか、記憶を継承する活動の課題点や展望はどんなものか、といったことを明らかにするために、2017年8月から10月にかけて、人と防災未来センター西館3階にて駐在している語り部ボランティア8名に対し、インタビューをおこなった。

お尋ねした内容は、普段語っている講話の内容、語り部を始めたきっかけ、一番伝えたいこと、東日本大震災を受けての語りや心境の変化、語り部のやりがい、語り部活動の課題点、語り部活動の展望などであるが、人によって質問内容は少し異なるので、以下の各自のインタビューにおいて記している。聞き取り内容は筆者がメモを取ると同時に、許可を得てレコーダーで録音している。また、講話の内容については、人と防災未来センター資料室が過去

¹⁰ 人と防災未来センター（2017）『人と防災未来センター平成28年度年次報告書』

に記録し公式サイトで公開している『震災を語る』シリーズ¹¹も参照しており、そこから引用している場合もあるが、その場合その点を明記している。

(2) 公的な立場にあった語り部たち

私がインタビューした 8 名のうち、震災当時公的な立場にあつて、震災への対応に携わっていた方のお話をまず挙げてみることにする。

(i) H.Y さん (60 代男性・元兵庫県職員)

筆者はまず、人と防災未来センター西館 3 階にて、H さんが普段来館者に対して行っている講話の内容を話していただくようお願いした。

「2 万人の人が避難所において、生きるや死ぬやの状況で何があつたら生き長らえますか？ (中略) 具体例として、1000 個おにぎりが配られたとしたら、どう配りますか？ 私はそうした場でどうしたらええかという答えがすぐわかる。答えの①は、1000 個のおにぎりを 2 万に刻む。②は 2 万人のうちワースト 1000 人に配る。ところが、それは平和な時の話。異常事態で、即刻命をつながねばならない時に、どこでもいいからはよ配れというのが答えだったように思います。そうすることで、1000 人が生き延びる。たとえ 1 万 9000 人が死んでも。そういうひどい現場だった。だから、公平に平等にという基準だけではなく、非常時の基準は違うんですよ。」

H さんは自らが行政職員として避難所の支援に携わった経験をもとに、行政の平常時の基準が緊急事態には一変してしまうことを伝えようとしている。そこには、メディア等の報道等では知ることができない、あるいは被災者であっても行政の立場でなければなかなか知ることができない実情を知ってほしいという思いがうかがえる。

また、『震災を語る』でも H さんは避難所の人々の様子について、「震災直後の数日間 (中略) 避難者は文句も言わず、水も食料も毛布も分け合い、助け合い、励ましあつて生きました。しかし、わずか数日で避難者の要望は変化してきました。「こんな冷たいメシが食えるか!」、「避難所が寒い、狭い!」 (中略) 要求はどんどん大きくなっていきました。際限のない人間の生き様を見た思いでした。」(『震災を語る』第 35 回) と語っている。

何もかもが不足した避難所でのぎりぎりの状況で、心に余裕がなく文句を言い始める人間の姿を見て、H さんは非常につらく苦しい気持ちになったのだろう。また、阪神淡路大震災が起きた時期について、

¹¹ 詳しくは人と防災未来センター公式ホームページ「資料・収集保存」から「震災を語る」を参照されたい。http://www.dri.ne.jp/material/material_stories (2017/12/10 最終閲覧)

「もうひとつ、変な言い方やけど1月17日といういい時期に来た。冬じゃなく夏だったら。未明じゃなく昼だったら。はるかに被害が大きくなってた。だから、いつ来るかわからん、というかまえをしてほしい。」

と話している。Hさんは「いい時期」に起こった阪神淡路大震災であってもひどい現場をまのあたりにしており、ましてやさらに被害が大きくなるような時期・時間帯に来ていたらどうなるのかという恐れは人一倍強いのだろう。そこから、阪神淡路大震災よりもひどい震災がいつ起きるかわからないという備えを人々にしてほしいのだという思いがうかがえる。

Hさんは当初、震災時は県職員として大変な思いをしたため、震災のことは思い出したくもないと感じ、語り部をする気もなかったが、退職をきっかけに自分の体験を伝えていきたいと思うようになったという。また、「東日本大震災を経て語りや心境に変化はあるか」という筆者の質問に対し、「いい意味でとらえれば、東北の地震があったおかげで、また備えなあかんという気持ちが起こってくれたのはいいこと」と東日本大震災が起こったことによる震災に対する意識の向上というプラスの側面を挙げ、「もっと露骨な言い方をすれば、阪神間でも時々揺れてくれたらええねん」というふうな強めの語調からは、市民の防災意識や危機管理意識の低さを実感しており、もっと震災に対する意識をもってほしいという思いが推し量られる。

(ii) Nさん(70代男性・元消防職員)

次に、震災当時消防士として救助活動にあたったNさんの話を紹介する。以下のNさんの講話は、人と防災未来センター西館3階にて、筆者を含めた来館者5名ほどに対しておこなったものである。

「(前略)私の所轄はたまたま火災がなかったんです。全部、倒壊家屋。でそこで、行ったときに、集まれ一言うたら(近所の人が)集まってくれて、で、「こんなかで、誰か近所の人で来てへんもんおるか?」とこういうかっこで(呼びかけたん)ですね。もう命令調ですよ。いっぱい倒れてるんやから。そしたら、この家族が来てないと、よし、今からそこへ行くぞと。私たちは、真っ暗けな中ですし、個人個人の家がなんていう家か、とてもやないけど覚えてるはずがない、そのようなもんで、近所の人に聞いて現場に行くと。行ったら、声を掛けたら、「助けてくれ」と。あ、これはおるな。で、電気をつけて、電気言っても懐中電灯ですけど、つけて、ま引っ張り出すんですけども。(中略)そのうち、うちの管内は火事がなかったんですけども、6時7時8時と夜が明けてきて、被害状況が分かって、非常招集がかかって、自転車とか単車ぐらいで駆け付けた時に、火災が発生しとるところに応援に行けと。それが8時頃です。5時46分に火災が発生して、8時20分です、ぼくが現場に着いたの、よその管内の現場に。もう、6,7軒が燃えとんです、家。6,7軒ですよ。誰一人(まだその時点では)消防隊は行ってないんです、そこに。というのは、神戸市49か所の

火災が発生したから、同時にそこへ行け言うても、救助に行くもんもおれば、消火するもんもおれば、まあほんとにバラバラに行ったわけですね。(中略)

まあ、そやけど一番困ったのは、火災現場に応援に行ったときに、倒壊家屋いっぱいあるんですわ。で、生き埋めになってる人いっぱいおるんです。家族が2時間たっても3時間たっても救出できないような状況です。でそういうところへ行って、隣は火事です、燃えとる。ぶわーっと燃えとる。こっちでは、何軒も家が倒れとる。それいづれ、その家全部燃えてしまったんですけれども。

当然ながら生きてる人助けることできなかった人いっぱいおります。そのまま焼け死んでいくと。もちろん、声かけてももの言わん人は、私たちはもう助けなかった。というのは、「助けてくれ、助けてくれ」言うてる人は助けに行きました。ここは声かけてももの言わんいうところは、仮に生きとったとしても、もうしゃあないです。絶対確実な方を助けに行かないと。そりゃもう、苦しいですよ、家族が横におるんやから。「なんで、おまえら、うちのおじん助けくれへんねや」とかこんなかっこうですね、もう、言葉なんかめちゃくちゃですよ。そういうなかで判断して、声がするとこ行くと、ゆうような判断しても、やっぱ家族は納得しませんわ。でーんと体当たりされて「なにやっとなじゃこらー！！」とこんな感じ。それでも、できないもんはできないと。声がする方助ける。」

Nさんの話の多くの部分はこのような、震災当日の臨場感あふれる消防士としての救助活動の一幕であった。Nさんの口調からは、甚大な被害を前に圧倒され、どうすることもできなかった無力感や、必死になって救助しているにもかかわらず罵声を浴びせられたことなどのやりきれなさがうかがえる。

またその後、筆者はNさんに対して個別にインタビューを行った。まず、語り部を始めたきっかけについて尋ねると、「(震災の)一か月くらい後に、近所の人に、N君あの時何しとったんや、と。なにをしとったんや言うても……。でもその人は奥さん亡くなったんや。だから向こうは腹立つとか悔しいとか持っていきようがなかったんやな。僕も何も答えなかった。そんなことがきっかけで、この地域で復興のね、役割を果たさなければここにおられへん。まあ消防の人間は一般の人よりは防災に詳しいから、そういう時に何らかの格好で力にならんと、村はじきみたいになるなと思って始めたんや。」

というふうに、震災当日だけでなく震災から一か月後にも近所の人に責められたことを話している。もちろん、近所の人たちもNさんが消防士として必死に活動していたであろうことは理解しているだろうが、あまりにも大きな災害が押し寄せ身内をなくしたショックで、救助する立場である消防士のNさんに行き場のない悲しみや怒りの矛先を向けるしかなかったと考えられる。それでも、何かしなければ村はじきになってしまうと思うほど、Nさんには自分に対する非難の声が強く心に残ったのだろう。

「一番伝えたいことは何か」という筆者の問いかけに対し、「あえてあえて言うなら、「過去の災害から学べ」ということやな」といい、「どうしたら命が助かるか、被害を少なくでき

るか」ということを自身の経験から伝えるようにしているとのことで、具体例として建物の耐震工事や部屋の改修などを挙げ、「まず自分の命は自分で守る“自助”を徹底してほしい」「神戸市消防 300 人ほどで、地震で最終的に 10 万棟がつぶれた、神戸市だけでも 8 万 5000 棟くらいつぶれてるでしょ。300 人でどないして対応できる？どうにもならんのか分かるやん」と、住民それぞれが命を守る方法を考える自助の必要性を繰り返し強く話し、その前提として大災害では消防などでは到底対応しきれないことをおっしゃった。

また、N さんが語り部を始めた 12 年前と現在とで、語りの内容に変化はあるかとの質問に対しては、「最初の頃は実情、こんな災害でしたっていう話が、だんだん日がたってくると、いろんな教訓をいかに伝えていくか、自分ができるとは何なのか、地域ができることとは何なのか、国や県がせなあかんこととは何なのか、ということが整理できてくる、時間が経つに従って。そういう風なことを市民の方に教えていく。ぼくの場合、「語る」というより「教える」やね」と答えた。この日私が聞いた N さんの講話はどちらかというところ生の体験談としての「語り」に近かったが、元消防士として市民の人たちが知らない現場の話を知ってほしいという思いや、そこから得た教訓を「教えよう」という意識が強いのかもかもしれない。

(iii) O さん (80 代男性・元消防職員)

また、同じく元消防職員だが、震災時は現場ではなく指揮を担当していた O さんにインタビューを行った。語りの内容で重視していることについては「公助と共助と自助、この中で公助はあてになりませんよ、ということは、警察消防自衛隊はね、そんな話をします」と、消防職員として公助がとても機能しなかったことを話す。

O さんは『震災を語る』においても「阪神・淡路大震災における救助活動は、自助が 70%、共助が 20%、公助が 10% だったといわれています。大地震直後の 10 時間くらいは、「消防車も、救急車も、救助隊も来ない」という最悪の事態を想定すると「自助・共助」が非常に大切だと思います」（『震災を語る』第 7 回）と述べており、自助や共助が重要であることを痛感し訴えている点は N さんと共通している。

また、語り部を始めたきっかけについて尋ねると「本当に悲惨な現場を見た人はね、あんまりここではね活動はしたくないんですよ。いわゆるあのね、PTSD とかねそういったことの、フラッシュバックのように当時のこと頭に浮かんでくると。（中略）私らみたいに、現場経験してないものはね、ある程度第三者的に話できますけどね。」と、N さんが経験したような現場からは一定距離を置いていたからこそ第三者的に冷静に震災の話ができるという。

O さんが普段どんな講話をしているか尋ねると、普段使用しているというパワーポイントを見せてくれたが、「阪神淡路大震災の教訓と課題」「公的防災機関の初動対応の限界」「同時多発火災発生」「大震災が発生時に最優先すべきこと」「多くの消防隊員の悪戦苦闘」などの項目に分かれており、阪神淡路大震災時の行政と市民の不備や課題点、公助の限界、火災のデータ、震災時に心構えておくべきこと、現場の消防隊員の苦労に主に分類される。O さん

んが自身の話を第三者的だとおっしゃるように、N さんの話していたような生々しい体験談よりは、どちらかといえば震災に関する客観的なデータや防災教育的側面の強いものとなっていた。

また、O さんが語り部を始めたのは 14 年前だというのが、年月を経ての語りの変化として「まあもう 22 年と 9 か月たってますので、そういった面では、ある程度ね、当時のことは客観的に見られるんですけど」「震災直後からやっぱり絶対に話さなければならないことと、それからあの一、阪神淡路大震災以後の東日本大震災の津波とかね、それから、山檜村の土砂崩れがけ崩れとか、次から次へと新しい地震の形態が出てきますんでね、それに対応したような内容をね。しかしまあ基本的には阪神淡路大震災とあんまりかわりませんわ」「はじめはこういったもの（パワーポイント）使わずに、ただ自分の体験を口で話してたけど、今はヴィジュアル時代でね、映像がなかったらなかなかね、特に小学生中学生は真剣に聞いてくれないということで。こういったパワーポイントなんかでするとね、真剣にね、まあ聞いてもらえると」など、体験の客観視、そのほかの災害への言及、パワーポイントを使った講話などが主な変化として挙げられた。

(iv) S さん (70 代男性・元コープこうべ工場長)

次に、コープこうべの生産工場の工場長として避難所への食糧配送に尽力した S さんの話を取り上げる。人と防災未来センター西館三階にて個別にインタビューを行い、まず S さんが普段行っている講話の内容を話していただいた。

「コープこうべの工場長として 13 の工場を束ねる役割をしてたんです。で、そこではたくさんさんの食糧ができるんで、神戸市と緊急時食料調達制度という協定を結んでおったんです。(中略) その統括をやってたんで、責任者として、特に最初の三日間ね、避難所における人は辛うじて生き延びてきた人やからね、そういう人に対しての食糧を僕の方でやったんです。神戸市(の避難所)で 19 万食、そのうちの約 7 割の食料は実はうちの工場から。(中略) 大きな災害の時は情報量はあまりあてにならない、目の前の出来事で判断せなあかんよと。

それは場合によったら超法規・・・例えば、“緊急避難食料調達車両”って勝手にステッカー一つつくったんよ。ステッカーつくる言うてもね、カレンダー引っぺがしてよ、筆と墨持ってこさして自分で勝手につくってそれをフロントガラス置いてやな、適当に腕章みたいななん巻いて、笛持たせて、ほんで道路自分らでコントロールする。警察に怒られたら、わしが全部責任持つから、かまわんからやれ言うて。僕なんか、バトカー捕まえて先導せえいうて、先導してもらった。民間人が警察にそんなこと指示できるか?できひんでしょ。でも、超法規ですわ。人の命を思ったらそのくらいせないかんよ。」

と、避難所への食糧配送のために時には超法規的措置で尽力したエピソードを話す。また

Sさんは「その場に応じた臨機応変な対応、だから僕は創意工夫とか超法規とかそういうことをものすごく話しするんですよ。最終自分の命を助けるには自分で行動せなだめですよ、“自助”っていう。その一環で、避難訓練というのをしなさいと。避難訓練と避難学習は違います、学習はここ（頭）だけ。ここで分かったことを、訓練はそれを行動として「できる」。「わかる」ことと「できる」ことは別。」と話す。

Sさんの工場はもともと、ガスの配管が通っていたり、高熱の窯やフライヤーが並んでいるなど危険な環境であったことから、阪神淡路大震災以前から避難訓練に力を入れていたという。そのおかげで、震災時に工場にいた500人ほどの職員のうちけが人が1名だけだったそうだ。その経験から、単なる形ばかりの避難訓練ではなく、自分の体で覚えこむ訓練の重要性を繰り返し話した。

語り部を始めたきっかけについて伺うと、Sさんはセンター設立当初は語り部をやることに抵抗があったという。その理由は、Sさんは震災発生後の混乱時、スーパーから食料品を略奪する人々を目撃したが、注意することもできず見逃した経験があり、そのことに罪悪感を感じていたということだった。しかし、21世紀研究機構の勉強会に参加する中で、野尻武敏教授（ひょうご震災記念21世紀研究機構元理事長）と出会ったことで語り部をする決心がついたという。

「野尻先生に、「略奪行為を見逃したので罪の意識で話ができないんです」といったら、なんと野尻先生はね、「君そんなこと気にする必要全然ない。略奪は確かにいかん行為やけど、目の前の食べ物を食べて命がつながるんだったらそれは超法規として許されてるんやぞ」ということを言われてね。えーぼくは犯罪を見逃したと思ってたらそうじゃなかったんや。そしたら、犯罪略奪行為があるんやけど、それをどうしたら早く収めることができるかの話をしよと思って、実は語り部をやり始めた」

またこれからの語り部活動や災害対応の課題点としては後継者不足や若者の人材育成を挙げ、「小さい子供の時でもええから体験したような人やっばり語り部として育成せなあかん。学生さんがあなた（筆者）みたいにヒアリングして僕らと直接対話して、それなりの理解納得したような人にも語り部として門戸開放して、幅広い人にそういうふうな活動に参加できるような体制を作らなあかん言うて、河田センター長にもさかんそう言うてるんや。」と、語り部の高齢化が進む現状に危機意識を持ち、幅広く若者にも語り部に参加してほしいということをおっしゃった。

また、災害に対応できるような若者の人材育成には実践・被災地に身を置くことが重要だと強くおっしゃり、「復興審議官に直接意見申し上げたんや。（中略）何をせえ言うたかいうと、こういうこと言ったんや。高校・大学の卒業要件に、被災地、なんでもええ災害の種類は問わない、ボランティアの体験で半年以上そこで実務体験済んだ人を卒業できるようにする。（中略）復興支援に若者を送るために、税制を変えて、復興特別税みたいなのを取って、若者の育成のための交通費の補助、宿泊の補助、あるいは各種活動の補助、そういうものを社会全体で出せるような体制づくりをしてもらいたい。いうのを提案したんですよ。」

と話す。また、提案だけでなく S さん自身も若者の育成に力を入れており、別団体では東北地方に復興支援バスを 40 回以上派遣して、ボランティアの若者にアドバイスをしながらともに活動している。

S さんは話の中で何度も「実践」「現場へ行く」「学習だけじゃなく訓練」という趣旨の言葉を繰り返した。そこには自身が震災時に食糧配送に奮闘し、自分の力で工夫しながら動くことの大切さを実感した経験と、「阪神の震災で、他力本願で、もう周りにおんぶにだっこみたいになってしまった人をたくさん見てる」という経験から、災害時に動ける人材をたくさん育成しておかねばならないという危機意識があるのだと考えられる。S さんの語りや活動内容からは、災害の備えや身を守る方法といった身近な防災ではなく、より根本的に災害に耐えうる人材を育成し、災害発生後も迅速に復興ができるような社会になることを意識している姿勢がうかがえる。

以上、行政職員や消防士、コープの工場長など、公的な立場（あるいはそれに準ずる立場）から災害時の対応や救助活動にあたった方の話を紹介した。上に紹介した四人は震災当時それぞれ違う持ち場で奮闘していたため、語りの内容のうち震災直後の活動内容についてはもちろん違っている。しかし、語り部の方が力を入れて伝えたい内容やうちにある思いや意識には共通した傾向がみられることも指摘できる。

ひとつには、行政や公助の限界を痛感し、自助もしくは共助の重要性を訴えていることである。元コープこうべ工場長 S さんに関しては行政や公助の限界については触れていなかったが、H さん、N さん、O さんは自身の経験から大災害においてはとても行政による公助だけでは太刀打ちできないことを実感を含めて話し、それゆえに住民ひとりひとりが自分の命を守る活動に尽力すべきことを強調していた。また S さんも、自身の工場の職員が日ごろからの避難訓練のおかげでほとんど被害を受けなかった経験から、単なる学習ではなく実践的な訓練で自分の命を守り災害に立ち向かうべきことを強調していた。そのことと関連して、四人は行政や住民の危機管理意識の低さや他力本願の姿勢に厳しい意見を持っていることも読み取れる。

H さんの「もっと露骨な言い方をすれば、阪神間でも時々揺れてくれたらええねん。風化する言われるけど、被害を受けた人、家族を亡くした人は風化するはずがない。被害を受けてない人が、風化する。」という言い方からは、実際に災害で被災していない人たちは災害に対する意識が低いことを指摘していると考えられる。O さんの「行政の危機管理の意識が低かった、東北では過去に大きな津波何度かあったのにその教訓が活かされていない」「今の人たちは他力本願、行政に頼り切る。自分たちで何とかしようとする自活力が弱くなっている」という言葉、S さんの「阪神の震災で、他力本願で、もう周りにおんぶにだっこみたいになってしまった人をたくさん見てる」という言葉は、震災時あるいは現在も、自分で考えて行動する力のない人がいることを実感しているから出てきた言葉であり、それが先ほど挙げた自助を徹底してほしいという姿勢につながっていると考えられる。

さらに、自助や共助を重視しているというその内容も、自分の命や地域をとりあえず守る

ために日頃から備えをしておくといった意味にとどまらないように感じられる。より広い意味で、大災害が発生した際にも行政や誰かに頼るのではなく、現場を見て自分の頭で考え自分の足で行動できるような、さらには災害からの復興にも積極的に動けるような人間になってもらいたいという強い思いがそこにはあるのではないだろうか。

ふたつめには、語り部を始めるにあたって必ずしも前向きな気持ちではなかったことである。Oさんは語り部を始めたきっかけについては「教訓を風化させずに伝えていきたい」と話すにとどまったが、Hさんは震災で大変な思いをしたためはじめは語り部をするつもりがなかったこと、Nさんは震災後近所の人に責められたため何か貢献しなければこの地域にいたることができないという思いに迫られて始めたこと、Sさんは震災時に略奪行為を見逃した罪悪感からしばらく踏み出せなかったこと、をそれぞれ話している。

三人は未曾有の大災害の中、自分のことを気にかける間もなく被災者の住民を助けるためにただひたすら奮闘しながらも、どうしようもないことや、思うようにいかないことに直面した。そのため、はじめは前向きな気持ちで記憶や経験の継承に向き合うことができなかったが、自分の中で徐々に気持ちの整理ができ、Sさんの「自分が生かされたから、命が尽きるまでこのことはやろう」という言葉に表れているように、使命のようなものを認識するに至った経緯が読み取れた。

一方、語り部活動等に関するそれぞれの考え方には当然ながら相違点がある。語り部の高齢化と後継者不足の問題について、Sさんは、小さいころに震災を体験した人や体験していても語り部から話を聞いて理解を深めた人にも幅広く語り部として門戸開放すべきということと話していたが、Oさんは「(震災当時) 小学校4,5年やったら当時の記憶あんま合っていないからね、少なくとも高校生くらい以上、こうでないとな当時のほんとの意味のね、記憶を語るいうことは無理だと思います」と、あまり当時の記憶が鮮明でない人には語り部は難しいのではないかという考えを述べた。また、後継者不足に危機意識を持ち幅広い人に語り部をやってもらうべきだという姿勢のSさんであっても、取材の中で「語り部は自らの体験だからみんなも納得して聞いてくれる。語り部は自ら体験してるからこそ、そういう迫力もあるし、僕なんか泣きながらでも話平気のできるしね」と話していた。阪神淡路大震災というのはあまりに強烈な体験であるため、実際に体験しないと本当の意味で伝えることはできない、という思いが無意識的にであれ根底にあることをうかがわせる。ただSさんは若者への継承や人材育成を非常に重視しており、別団体で若者のボランティアとともに被災地支援に行っていることや、何度も「実践」「現場、現地」の重要性を強調していることから、実際に大災害を体験している者とそうでない者(主に若者)の溝を補完するようなものとして、被災地ボランティアという、災害発生後の地に赴き、自分の体で現場を体験する活動を捉えているとも考えられる。

(3) 一般の被災者の語り部たち

次に、公的な立場以外で震災を経験した語り部の方の話を見ていくことにしよう。まずはじめに、住吉の自宅で一時間半ほど生き埋めになった経験と避難所生活の経験を持つ M さんの話を紹介する。

(i) M さん (80 代男性・元大学事務職員)

M さんも人と防災未来センターで活動する語り部であるが、以下に上げる M さんの講話は、「震災モニュメント交流ウォーク」というイベントの中で行われたものである。「震災モニュメント交流ウォーク」は認定 NPO 法人 1.17 希望の灯り (HANDS) が主催しているイベントで、参加者は阪神淡路大震災の慰霊碑を巡りながら、各所で当時を知る被災者や語り部の説明を受ける。M さんの講話は、慰霊碑を巡ったのちに到着したコープこうべ生活文化センター内の会議室で、筆者含む参加者に対しておこなわれた。

また後日、人と防災未来センターにて M さんに個別インタビューを行った。

「(前略) すぐおさまらだろと思ったんですけど、収まるどころかね、これは一おかしいぞと思った途端ね、家と筆筒の下敷きになりましてね。両腕にね、力を込めてね、両足を踏ん張って持ち上げようとしたんですけどもね、びくともしないんですね。(中略) しばらくしたらね、私の頭上あたりですわね、「おとうさーん、消防署へ行ってきたから大丈夫ですよー」という家内の声がかすかに聞こえたんですね。続いてね、「おとうさーん、頑張ってる」という娘の声が聞こえたんですね。(中略) しかしね、圧迫されていた下半身ね、感覚がなくてね、体が熱くて熱くてね。頭がぼーっとして意識朦朧となってしまったんですね。いまにも頭が破裂しそう、目の玉が飛び出しそうになったんですね。ああ、もうだめだ、と死を覚悟しました。死ぬというのはこういうことか、案外楽に死ぬるんだなあ、とこう思いましたね。

しかし、その瞬間、自分だけの体ではない、このまま死ぬわけにはいかない、家族がいる、年老いた両親が別居している、職場がある、そういったことが頭にひらめいてね、どうせ死ぬなら最後の最後まで頑張ろう、やるだけやって自分を納得させよう、と、片手を伸ばして先ほどの板にあけた穴のようながありましたんでね、そっから、指を突き出してね、「引っ張ってくださーい」ってありったけの声で叫んだんですね。するとね、その時ね、誰かの指先と私の指先がほんのわずかに引っかかったんですね。ほんの数センチ引っかかってね、引っ張ってくれたんですね。するとね、自分ではどう動いても動かなかった体がね、少しこう動いてね、そのまま特段の抵抗もなく引き上げられてね、外へ出ることができたんですね。」と、自分が自宅のがれきの下から近所の人に引き上げられて奇跡的に助かった経験を語った。

その後、避難所での生活で、隣にいた家族のエピソードについて語る。その家族は両親が視覚障害で、小学生の子供が二人いたという。しかし地震発生から数日後の夜、父親が突然倒れてしまったという。

「それに気づいた周りの人、みんな「どうした!？」ということで懐中電灯でね、こう照らして、男性たちは交代で心臓マッサージしたんですね。その様子をね、並んで立って半泣きになって見ておったその兄弟、みんなに促されて「おとうさーん、がんばってー」叫んでましたね。周りの人たちも「子供のために、がんばれよー」って励ましたんですね。」

残念ながら、その父親は病院に運ばれたものの亡くなり、翌日病院に行っていた親戚とふたりの子供が荷物を引き取りに避難所に帰ってきたのだが、そこでMさんはその子供たちの親切心に驚き感動したという。

「その時ですね、私は見たんですね、並んで立っていた兄弟のうち、女の子のほうはね、まだ新しい牛乳パックをね、小脇に抱えるように持っていたんですけど、それをね、「残っている人に置いていってあげよう」とこう言ってるんですね。弟のほうはね、「お姉ちゃん、それだったら早く飲むように書いておこう」とこう言う話をしとるんですね。私はね、まだ体が痛かったのでね、床の上にね仰向けにこう寝たままだったんですけど、それをそばで聞いておましてね、胸が熱くなりましたね。こんな子供でも、こんな優しい心を持っているのか、ととても感動しましたね」

Mさんが語る避難所でのエピソードは、大変な思いをしたり苦労したという話ではなく、親切な人やボランティア精神にあふれた人々の話に重点が置かれている。気丈で優しい兄弟以外にも、家が全壊しながらもボランティアをする女性について語る。

「それからね、家が全壊した近所の奥さん、この方も同じ避難所にいたんですけど、この方が学校のグラウンドでボランティアの人と一緒に炊き出しに参加して、配っておるんですね。私はそれを見てね、あの奥さんえらいなあ、自分の家がつぶれてる時に、みんなのために頑張ってる、えらいなあととても尊敬しましたね。」

避難所での話の締めくくりにMさんはこう話した。

「今から思うとね、あの時はね、みんな優しくなっておりましたね。みんなねお互いに被災者同士ね、「お宅はどうでしたー?」「私のとこはああでしたこうでした」「よかったですねー」とか「大変でしたねー」といってお互いに慰めあってね、励ましあってね、そこにはね、庶民的なぬくもりというものがね感じられましたね、私は特に不愉快なこともなく、避難所生活を去ることができたんですね。」

一通り体験談を語り終えると、震災を通じて学んだ、感じたことを話した。

「そういったね、体験を通じまして、私が震災から学んだこと、学んだこととか感じたことですね。ひとつは、人の優しさ。あの地震で、本来人間は生まれた時から優しい心を持っている、その優しい心が、あの地震でパニック状態の時に、一人ひとりの心の中に、その優しいところが戻ってきたんだなあということを実感しましたね。それから、ふたつは、助け合いの大切さ。命の大切さ。共に生きていく、人は助け合って共に生きていく。そのためには、一人ひとりの心の中に思いやりとか愛というものがなければならないということを実感しましたね。それから、最後に常に備えよということですね。私の元の職場の近くに、震災記念碑が立ってましてね、その、この場所にね、「常に備えよ」という碑がたっ

てましてね。日本列島は地震列島ですからね。(中略) 下敷きにならないためには、ね、私の経験からはっきり言えますように、筆筒や家具のそばでは絶対に寝ない。(中略) それから、焼け死なないためにはどうしたらいいか。これはまあ簡単ですね。私たちが普段からね気を付けておくことですね、自分の家から火を出さないということですね。」

Mさんの講話はこのように、震災時の助け合いや親切な人々の話が大部分を占めている。崩れた家の中に埋もれた自分を近所の人々が助けてくれたこと、避難所での心優しい兄弟、被災しながらもボランティアに励む人、また上記では省略しているが、社宅を用意してくれた職場仲間のことなども語っていた。なまともとして後半に語られた、「地震から学んだこと」についても、人の優しさ、助け合いの大切さ、備えの大切さの三つを挙げているが、Mさんが語る体験談の内容の大半は、前者二つの人の優しさ、助け合いの大切さを示すエピソードである。自分が生死の境にいたところを家族や近所の人に救われた経験から、周囲の人々に対する感謝の念が非常に強いことが読み取れる。また、あまり居心地の良くない場所であるはずの避難所での生活も、人間の持つ本来のやさしさや強さが発揮されていることを感じた場面として語られている。

また、Mさんは話の最後に「どうぞ皆さん方もね、これからね、元気で長生きしてね、自分だけの命じゃない、家族のためにね、あるいは、誰かのために生きる、頑張る、そういう気持ちをもってね、健康で長生きしてほしいなあと、こう思います。」と聴衆に呼び掛けた。語りの多くが助け合いや親切のエピソードであることや、この言葉を踏まえるとMさんが聴衆に共有したいと思っていることは、防災・減災や震災時の対応の仕方というよりも、震災時に限らず普段から周りの大切な人を思いやり、自分だけではなくほかの人のために頑張って生きてほしいというような、より広い意味での人生訓や心構えのようなものだと考えられる。

(ii) Tさん(80代女性・元大学非常勤講師)

Tさんは、Mさんと同じく自宅で生き埋めになったところを救出された。『震災を語る』の中で、彼女も以下のように語っている。

「1995年1月17日、内陸直下型の阪神・淡路大震災によって、私は築50年になる日本家屋の2階で一瞬のうちに生き埋めになりました。夏だったら1階に寝ていて下敷きだったのですが、幸い冬場でしたので2階に寝ていました。和室で寝ていた夫は、マグニチュード7.3の揺れによって南側の廊下に飛ばされ、私は起き上がれないまま布団の中で家が東に倒れていくのを感じ、「倒れる、倒れる…」と言いながら気を失いました。(中略)

どれだけの時間が経っていたかわかりませんが、私は苦しくて目が覚めました。辺りは真っ暗で、物音ひとつしない不気味さ。そっと足を伸ばすと、足先にサラサラと土が触りました。「生き埋めになってしまった…もうダメかな?」という考えが、一瞬頭をよぎりました。

(中略) ひたすら救出を待つものの、苦しさが増してもう我慢も限界。もう最後、と思って声を出した時、「今、行ってあげる!」という外からの声がかすかに聞こえました。(中略)

救出されるまでは随分長く感じましたが、約 3 時間後に男性が 5 人がかりで私を布団でくるみ、引っ張り出してくださいました。この時のことは、今でも昨日のことにように覚えております。私は自宅 2 階の床が抜けたために、頭を下に足を斜め上にした状態で埋まっていたそうです。苦しかったはずですね。助けてくださったうちの 3 人は知らない方で、未だにお礼を言えていないことが大変心残りです。

震災の直後から多くの方の温かい心に触れ、また支えがあって、今日まで生きる力を与えていただきました。人と人との交わりの大切さを教えられた、貴重な体験の数々。そのうちのいくつかを、感謝の気持ちを込めてご紹介したいと思います。

- ・頭や体中を打って、口をきくことも立ちあがる元気もない私を見た友人が、病院に掛け合ってください 3 日間入院することができました

- ・1 週間後に娘が千葉から迎えに来てくれ、1 カ月ほど千葉で生活させてもらいました

- ・家屋解体の時に取り出した少々の家具を、西明石に住む友人家族が家屋再建までの間預かってくださいました

(など、周囲の人に助けてもらった感謝のエピソードが 17 個あげられている、中略)

震災のことは、誰かが語り継いでいかなければ、忘れられていってしまいます。センターを訪れた方には、何かを学んでほしいですね。そして、何かのきっかけで学んだことを思い出していただきたいです。語り部さんたちは、同じ震災でもそれぞれ違う体験をされています。でも、「私たちが語り継いでいこう」という思いは、皆さん同じであると思います。」(『震災を語る』第 19 回より)

震災時に自宅で生き埋めになった体験と、自分を助けてくれたさまざまな人々への感謝の思いが中心的な内容になっている。

人と防災未来センターにて T さんに個別インタビューを行った際、筆者が語り部をはじめたきっかけについて尋ねると、T さんは「震災で三時間埋まって、助けていただいたその経験が一番のきっかけ」と答えた。

二人の話からは、前述した公的な立場にあった人たちの語りとの違いがうかがえる。元兵庫県職員の話していた、避難所で要求をエスカレートさせた避難者の様子であったり、消防士の N さんが罵声を浴びせられた話とは、かなり温度が違うように感じられる。むろん、どちらもそれぞれが肌で感じた真実であり、限界状態におかれた人間の嫌な側面も優しい側面も様々な場面で混在していたのだろうと思われるが、このような違いが表れた大きな理由はやはりその人の立場にあったのだろう。

M さんの話に沿えば、一所懸命被災者の救助や支援に励む行政職員、消防職員も感謝される対象になりそうなものだが、公的な立場にある職員が住民を救援するのは当たり前の義務であり仕事だと認識されており、不完全であれば非難される。しかも、義務を拒否することはできず震災後は不眠不休で働いた職員もいたことだろう。一方で一般の住民同士が

向け合う優しさや思いやりは任意のものであり、疲れて休憩したからと言って責められるものではない。救いの手を差し伸べている点では同じでも、その受け取られ方はずいぶん違ったものである。

また、公的な立場にあった語り部の方が強調していた「自助、共助の大切さ」というのは、M さんの話す助け合いの大切さとつながらないわけではないが、含有されている思いには大きな違いがある。公的な立場にあった方々は、震災時行政や消防による公助ではどうにも対応しきれなかった苦い経験から、自分の命や地域を自分たちの力で守ることを重視しているのに対し、M さんは自分の命を近所の人によって救われ、また避難所でも多くの人の優しさや強さに触れた温かい経験から、助け合いというのはやはり重要だと認識するにいたったといえる。さらに、公的な立場にあった語り部の方が自主防災組織の必要性や実践的な避難訓練など、具体的に災害に対応する力をどちらかといえば重視しているのに対し、M さんはより広い意味で、震災時にとどまらない、人間の優しさや思いやりといった形のないものを重視しているといえる。

もちろん、震災時公的な立場にある職員が一様に文句や非難を浴びせられ、住民同士はみな思いやりと優しさをもって接していたというわけではないだろうが、語り部の方が語りの中心に持っているエピソードや伝えたいことの違いには、震災時に何を感じその後どう考えるようになったのかの違いが表れている。

(iii) A さん (70 代男性・元自動車販売会社経営)

次は、震災以前から現在に至るまでボランティア活動に熱心に取り組んできた A さんの話を紹介する。筆者は人と防災未来センター西館 3 階にて、A さんに個別にインタビューを行った。

普段行っている講話の内容をおたずねすると、A さんはまず、自分が震災以前から子供たちとひまわりを植える交流活動を行っていたことを話す。それから、普段も講話で使用しているという写真パネルを紙芝居のように立て、神戸のさまざまな場所の震災当時の写真とその 10 年後の写真を比較しながら話してくれた。

「(写真を見せながら) 皆おじさん撮った写真だからな。10 年後に同じ写真撮ったんや。(銀行のある建物の写真を見せながら) 三菱銀行が東京三菱に変わっとる。いま、三菱東京 U F J 銀行。須磨の海浜公園行ったことある? (写真を見せて) あの前にこういうビルがあったんや。下が車庫になってるタイプはよく壊れた。こっちは(隣のビルは)壊れなかった。日産マーチのどこ。同じ、10 年後。(同じ場所の 10 年後の写真を見せて) この木は、この木やな。(比較しながら) おもしろいやろ。

なんでこういう写真見せるかというとな、修学旅行生が来た時に、みんな神戸がきれいな街になってよかったっていうから、こういう話したげんねん。震災があって、一軒家がつぶれた。ローンが残ってた。でももっかい建てなあかんから、2 本目のローン立てた。これが

二重ローンや。その二重ローンが、払い続けて、やっと終わったか終わらないか 20 年たったのが今の神戸や。そういうこと分かったうえで、いい街になったということ、わかっただけでほしいと。見えないやろ、やっぱ、みんな風景とかきれいって言うけど。そうじゃなくて、そこにはやっぱそういう苦しんでローン地獄払い続けた人の姿が見えないやな。で、大事なものはまあ、東日本大震災ではそのローンが始まってんねん。熊本ではローン組む組まないのど。国は個人の財産補填しないから、まあ仕方ないと思うけど。」

このように述べて、震災時と 10 年後の比較写真を見せるのは、神戸の人々が苦しみながらも努力してきた結果今のきれいな神戸の町があるということ、わかっただけでほしいからだと説明する。

その後、話は震災当時の A さんのボランティア活動の話へと移行する。

「阪神でそれ（ボランティアで何をやる必要があるか）を考えた時に、みんな頭かいててな、あ、風呂がないと思って。それで作ろうと思って。（写真を見せながら）トラックの上のトイレくらいの部屋を六つつくって、三人が同時に使える。着替えて、あったかいシャワー。一番最初に行ったのが、ポートアイランドの港島中学。（中略）で行って、水がないと。やっぱ所詮ボランティアってのは金ないんだよ。知恵はタダなんだよ。考えるという。そこが大事。うーんと考えて。そしたら、プールにいっぱい水があつて。海上自衛隊が運んだ。やけど、「それ飲めないよ」と（言われた）。や、シャワーの水飲んだりしないでしょ、洗うだけや。（シャワーが完成して）で、人が並んで、わしの顔見て泣いてんねん。兄ちゃんありがとうって。いろいろやってきたけど、泣きながらありがとうは初めてやな一おもてすごい感動した。あれ、神戸が僕を必要としてる。だから、僕を生かしてくれたんだと。そういう人間なんだと思えるようになった。」

A さんに一番伝えたいことを尋ねると、一番はボランティア活動の話だということ。A さんは阪神淡路大震災当時だけでなく、東日本大震災後に東北でひまわりを咲かせる活動をおこなったり、熊本地震で被害を受けた地域に食器を届けるなどの活動をしている。また、ボランティアをするにあたって何が大切か、ということも強調して話す。

「ボランティアうまくやろうと思ったら、先行型。先を見据えながら、考えながら動くことが大事。先へ先へと考えながら動く」「金はないけど、知恵を出せばいろんなことができる。」と A さんはいう。

また、A さんは語り部活動の課題や問題だと思う点について尋ねたところ、興味深い答えが返ってきた。

「ここ（人と防災未来センター）はざくつという、みんなこんな目にあつたよ言いながら、実は防災教育をしゃべってるきらいがある。僕もそうやろ？みんなそうだよ。娘をなくしたけど、だから親孝行しなさいとかさ。家つぶれたから、耐震補強大事だとか。どっかそういう教育的になっちゃうんだな、それは仕方ないけど。（中略）だから今（センター設立から）15 年たってそういう過渡期があらわれる。じゃあ、これから新しく語り部として入

ってくる人も結局は同じだよな。新鮮に当時のままをしゃべるっていうのが、もっとなんか大事なものが必要なんじゃないかとみんな思うわけよ。だから、経験に、こうやったらよかったということを足してしゃべろうとするわけ。だから、純粹じゃないところもあんな。要するにええとこどりみたいになっちゃう。人の話が面白いのは失敗談。だから今ええとこだけしゃべったけど、実はいろいろ失敗があるわけよ。」

つまり A さんによると、人と防災未来センターの語り部の語りは、年月を経る中で体験談そのものだけではなく、教訓をつけ足していった防災教育のようなものになりつつあり、そしてその語りというのは、「ええとこどり」のようになってしまうという。

この「ええとこどり」というのは、講話の 20~30 分という時間の制約によるものもあるだろうし、年月を経るにつれてどうしても生々しい記憶が薄まって、だんだんと語りから余分だと思われる部分がそぎ落とされ、失敗は語られることが少ないか、もしくは教訓として言い換えられ、きれいにまとまった話になりがちだということだと考えられる。

“語りの（防災）教育化”という指摘については、この後紹介する語りも踏まえたのちに考察したいと考える。

(iv) H.U さん (70 代女性・主婦、ボランティア活動)

「震災当時、私たち家族が暮らしていたマンションは高速道路がつぶれた場所のすぐそばにありました。1 階がつぶれてしまって自宅への立ち入りが禁止になるなど、このあたりはもっとも被害が大きかった地区です。「地震なんて人ごと」ずっとそう思っていたから、何ひとつ防災の用意はなく、意識もゼロに近い状態でした。突然襲ってきた大地震によって、家の中はミキサーにかかったようにもうめちゃくちゃ…しばらくは何が起こったのか全くわかりませんでした。(中略)

自宅に戻れなかったため、住むところが見つかるまでのあいだ車の中で 1 週間、その後公園にみんなでテントを張って 4 カ月間生活していました。ライフラインが寸断され、不自由な毎日を送る中で「水」のありがたみをひしひしと感じました。(中略) 避難生活をしているあいだ、私は炊き出しのリーダー格として火の番をしていました。はじめは自分と家族のために夢中でとった行動が、自然と人のためにもなっていたんです。被災した人々はみな疲れ果てていて、なかなか自分で何かをしようとしなかったんですね。ただ途方に暮れ、誰かが何かをしてくれるのを待っていました。でも、人に助けていただくことと甘えることは違うんですよね。自分にできることは、自分でやっていかなければダメ。(中略)。一人きりになるとものすごい不安に襲われて呆然としてしまう。それが怖いから人の支えあいがある自然と生まれ、また人のところに本当の意味で感謝できるようになっていったんだと思います。人のぬくもりって本当に心強かったですよ。(中略)

たくさんの人の力を借りて復興が進められ、今では、ここであんな大きな震災が本当にあったのかと思うほど、きれいに街並みがよみがえりました。でも、被災した私たちのところの傷は、10 年経ったからといって元の状態に戻るわけではありません。震災孤児の中にも、

心身のケアをまだ必要とする人が多いといいます。人の命というものは、なくなったら終わりじゃないんですね。亡くなった人の命が、生き残った人たちにどれほど大きな意味を残していくか…。消えていったたくさんの命を目の当たりにした息子たちをはじめ、私たちは命の重みをずっしりと受けとめて、今も苦しみながら生きているのです。」（「震災を語る」第3回より）

このHさんの話は2004年当時のものだが、Hさんに語りの変化について尋ねたところ、基本的に語りの内容やスタンスは変わってないという。またHさんが語り部を始めたきっかけも「震災の時にいろんな人にお世話になったから、なんかお役に立ちたいなあというのがきっかけ」とのことなので、人のぬくもりや支えあいを重視している点で、自宅で生き埋めになったというMさんの語りやや似た性質が感じられる。

ただ、注目したい点として、後半に語られていることは、一見きれいに復興したまちも、実は多くの傷や悲しみを抱えていて、生き残った自分たちは亡くなった命の重みを受け止めて現在を生きる、という視点である。また、Hさんに東日本大震災を受けての心情や語りの変化について尋ねたところ、「気持ちの中の被災というのか、目に見えない被災がたくさん出た、出るやろうなあっていうのがすごく悲しい」と話した。このことから、Hさんはどんなに街の復興が進んでも、地震で亡くなった人や悲しみを背負った人の思いを共有しながら生きてほしいというメッセージを伝えたいのだと考えられる。この点については、やや内容は異なるが、先述のAさんも「神戸の人々が二重ローンを苦しんで払い続けた末に今の神戸のきれいな街があることを知ってほしい」という趣旨の話をしており、「復興したきれいな神戸の背景にある人々の苦しみや悲しみを知ってほしい」という思いが共通してうかがえる。

また、人と防災未来センターにおける語り部活動がどうなっていくと思うかという展望について尋ねたところ、Mさんは「難しいですね、だんだんね、経験者も高齢化していくからね。（中略）僕らの中でも、これからどうなるんだということは（笑い）、あなたと同じように危惧してるんですよ。（後略）」と答え、Aさんは「今しゃべってる人間が死んだら続かないよね、震災後に生まれた人は聞いた話しかしゃべれない」と答え、語り部が途絶えることへの危惧や後継者不足について話す。また、Hさんは「ここはやっぱり、阪神淡路大震災の形を伝えるところなので、それはまあ変わらないと思うけど、（中略）今ものすごくあちこちで災害多いでしょ。だからその災害に合わせた、いろんな備えていうのも変わってくると思うのね。だからそういうのも常に考えながら伝えていかないといけないと思います。」と、阪神淡路大震災以降やこれから起こる災害に合わせて備えなどの伝え方を変化させるべきと話す。

以上、公的な立場ではない語り部4人の話を紹介した。経験も語りも人によってさまざまであり、一概にその語りを分類できるものではないが、それでもやはり公的な立場にあった方の語りとそうでない方の語りは傾向が異なることが指摘できる。まず、公的な立場になかった方の語りは、口調も内容もソフトであり、震災の具体的なデータや防災・減災の話よ

りも、人間の人生や心のあり方のような話を中心的にする傾向がある。公的な立場にあった方がそれぞれ強調していた「自助の重要性」「実践的・具体的な備え・訓練」「震災に立ち向かえる人材・自主防災組織の育成」は全く触れられていないか、もしくは触れられていたとしても、「たんすの近くで寝ない」といった、個人で簡単にできる備えに触れるにとどまっている。また、4人のうちMさん、Tさん、Hさんは自分を助けてくれた人々への感謝や人のぬくもりのありがたみについて話している。特にMさん、Tさんは自宅で生き埋めになり生と死の境にいたところを「助けられた」立場であったことから、ほかに大変なことや苦勞した出来事があったとしても、助けられたことへの感謝が第一に来るのかもしれない。

第3節 語りの比較による分析と課題点

ここで、先ほどAさんが指摘していた“語りの教育化”について考察したいと考える。筆者は“語りの教育化”は公的な立場の方の語りにおいてより強く表れている傾向なのではないかと考える。元消防職員のOさんは「まあもう22年と9か月たってますので、そういった面では、ある程度ね、当時のことは客観的に見られるんですけど」と震災時の経験を客観的に見るようになったと話し、実際にOさんが講話で使用するパワーポイントは教育に近いものであった。

同じく元消防職員のNさんは「最初の頃は実情、こんな災害でしたっていう話が、だんだん日がたってくると、いろんな教訓をいかに伝えていくか、(中略)ということが整理できてくる、時間が経つに従って。そういう風なことを市民の方に教えていく。ぼくの場合、「語る」というより「教える」やね」とおっしゃっており、家庭において実施できる個人レベルの備えの必要性から、地域において自主防災組織を構築する必要性まで、公助に頼らずにひとりひとりが、またその個人が属する地域コミュニティが、災害に対応すべきことを強調された。元コープこうべのSさんも、実践的な避難訓練の重要性を強く伝えている。このことは、Aさんのいう“語りの教育化”に合致している。

ただ、公的な立場にある方の語りが教育的になっていることは、このように時間の経過により経験が整理され、客観的にみられるようになっていくということだけではなく、これらの方たちの、公的な立場ゆえに味わった強烈な経験に起因するところが大きいのではないかと考える。先述した公的な方の語りにおいて、大災害を前に消防や行政では全く歯が立たず、それでも連日自分を犠牲にして必死の救援・支援活動をおこない、にもかかわらず時には非難の言葉を投げかけられる強烈な経験が伺い知れた。その経験ゆえに、公助に頼るのではなく、自分自身あるいは地域コミュニティで災害に対応する力を身につけてほしいという強いメッセージを発信していると考えられる。

それと比較すると、公的な立場以外の方々の語りは、防災教育といった災害に関連する教育的要素は薄いように思われる。先述のように、個人レベルでの備えについて触れる方はおられるが、それよりも自身の体験談から導き出された「人の優しさやぬくもりのありがたみ」

「助け合いの大切さ」といった人生訓のような内容が話の山場であったり、自身のボランティア活動の紹介とボランティアにおいて重要な心構えなど、自身のユニークな経験を活かした講話であったりする。

これらは、震災の経験から発生した語りではあるが、災害にとどまらないより広い意味合いを有する。そしてこれらの方の語りは、生き埋めを経験した M さんの「こういう体験もあったんだなあということを皆さんに知ってもらえれば。(中略)ですからレクチャーとしてこうしなさいあしなさいということは言ってないんですね。」という言葉や、T さんの「センターを訪れた方には、何かを学んでいってほしいですね。そして、何かのきっかけで学んだことを思い出していただきたいです。」という言葉に象徴的であるが、聞き手が知らないような特別な経験や知識を教えようという意識よりも、自身の経験を聞き手と「共有」する中で、聞き手の中になにか響くものがあれば嬉しいというスタンスが感じられる。また、自身の体験談だけでなく、きれいになった神戸の街はたくさんの悲しみと苦しみの上に成り立っているという「神戸の街が抱える思い」を共有したいという気持ちも感じられた。

公的な語り部の語りが教育的であり、それ以外の語り部の語りは教育的要素が薄いと述べたが、岩崎(2008)は災害教育を二つに分類している。岩崎によると、教育とは instruction (知識を教え込む教授) と education (力や個性を引き出す啓発) の二面から成り立つといわれており、災害教育については、地震の科学的知識や災害対応法を教えるのが前者の面であり、被災者の悲しみや苦しみに共感し防災や減災に対する関心を啓発するのが後者の面である。また岩崎は、知識やマニュアルにあふれた現代においては後者の面が重要になると述べている¹²。

この岩崎の分類に沿えば、語り部活動全体が災害教育の一環に属し、公的な語り部の語りは前者の instruction の要素が強く、公的でない語り部の語りは後者の education の側面にあてはまるということも可能であるかもしれない。しかしながら、あくまで災害教育の分類である education は、被災者の苦しみに共感し「防災や減災に対する関心を啓発する」という教育的な目的が付された定義であり、前述した公的でない語り部の方々の、自らの体験を共有する中で聞き手に何かしら響くものがあればよいという意識とずれるものであると考える。

以上から、それぞれの語りがさまざまな要素を含んでいることは前提としたうえで、公的な語り部の語りは災害対応能力を身につける重要性や避難訓練や備えの実践など教育的要素が強く、公的でない立場の語り部の語りは、人の優しさや助け合いの大切さを実感した自らの体験を共有するものであり教育的要素は少ないと考えるのが妥当である。

このような、語り部の方の語りのスタンスや伝えたいことの違いを、別の種類の記憶の継承活動と比較しながら考察してみることにする。根本(2010)は、広島における原爆の記憶

¹² 岩崎信彦(2008)「『災害文化』と『災害教育』を考える」岩崎信彦、田中泰雄、林勲男、村井雅清編『災害と共に生きる文化と教育』pp.9-11、昭和堂

を語り継ぐ活動（証言活動）に関して、「体験を語るだけでは不十分である」という考えと、「体験のみを語るだけで十分である」という考えという、二つの対立的な考え方が存在することを指摘している。前者の立場は、体験を主観的に語るだけでなく、日本の加害者としての立場も含めて戦争と原爆被害の特徴や、現在の政治状況等も踏まえて系統的に伝えるべきであるとしているのに対し、後者の立場は、被爆者がそれぞれの生々しい被爆体験を語ることで聞き手がその痛み・苦しみ・悲しみを追体験し、継承することを重視しているという。根本によれば、はじめ原体験の継承から始まった活動が、徐々に平和教育が広まる中で、戦争の原因や加害責任といった主題にもその射程を広げていった。一方で、被爆者が証言活動の組織への参加等を通して原爆や平和について学習するようになった結果、証言が画一化したり機械化する傾向に疑問を持ち、あくまで生の被爆体験を話すことを重視する人々もいるという背景がある¹³。

また、高山（2008）は長崎の原爆の記憶の継承活動においても、「自らの被爆体験をストーリーの中心におく」人々と「自らの被爆体験にはあまり言及せず、被災後の人生において築いた平和観を中心におく」人々と大きく二つに分類できると述べる。またこれらの語りの違いは、所属する語り部の運営組織の違いにそのまま通ずるといふ。平和観というのはいやあまい言葉であるが、高山によると、この後者の語りのほうがより平和教育的な活動であると述べられている¹⁴。

以上のように、原爆の記憶の継承活動においては、自らの体験をそのまま語ることを重視するのか、あるいは体験だけでなく戦争の原因や社会的・政治的状況も含めて語るのか、という対立がみられる。それでは、阪神淡路大震災の記憶を語り継ぐ活動との共通点や相違点はどのようなものであるだろうか。

まず、共通点としては、体験談以外の知識や教訓などさまざまな情報を含んだ語りと、自らの体験を話の中心とする語りの2タイプに分かれるということである。前者は公的な立場の語り部であり、後者が一般の被災者の語り部の語りである。また、公的な語り部によりよく見られる傾向である、はじめは体験談や事実を語るものであったのが、時間を経て教訓や教育的要素が付与されていくようになった点も似通っている。

しかしながら、多くの相違点も指摘できる。先ほど語りのタイプが二つに分かれる点が共通していると述べたが、原爆の記憶の継承活動における2つの考え方が、互いの立場を批判的にとらえ対立しているのに対し、阪神淡路大震災の記憶の継承活動においては、少なくともはっきりした対立は見られない。

つまり、原爆の記憶の継承活動においては、例えば平和教育にシフトした画一的な語り

¹³ 根本雅也(2010)「原爆を語ること、平和を訴えること」平和と和解の研究センター足羽與志子、濱谷正晴、吉田裕編『平和と和解の思想を尋ねて』pp.70-79、大月書店

¹⁴ 高山真（2008）「原爆の記憶を継承するー長崎の「語り部」運動から」桜井厚、山田富秋、藤井泰編『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』pp.36-48、せりか書房

疑問を持ち、あくまで生の体験を語ることを重視し、考えの異なる団体から距離を置いて活動する人があらわれたり、継承活動の運営組織によって語りのスタンスが異なるというように、お互いの立場を批判的にみることで自分の立場を確立していったり、考え方の違いによって組織が異なるといった対立がみられる。

それと比較して、阪神淡路大震災の記憶の継承活動においては、語りの内容やスタンスが異なっても、ゆるやかにひとつにまとまっていると見受けられる。筆者が人と防災未来センターにてインタビューを行った際も、インタビュー終了後、語り部の方の多くが「ほかの人の話もぜひ聞いて」「あの人は消防士やったから勉強になると思うわ」などと言って、ほかの語り部の話を聞くことを推奨したり、同じ階にいる語り部の方を紹介してくださることも多々あった。これは、語り部がそれぞれ異なる語りをするを踏まえて、さまざまな種類の話聞くことで知見を深めてほしいという思いだと読み取れる。そもそも多様な語りをする43人の語り部を一つの人と防災未来センターという組織が抱えていることから、語りのスタンスの違いから対立するのではなく「震災の記憶や経験を語り継いでいこう」という大きなくりの意識のもとにまとまっていることを示しているともいえる。

この違いから読み取れることは何だろうか。思うに、被爆という体験は被爆者にとって人生を根底から覆すような悲惨な体験であり、人生観の根本に根差すものである。さらに、原爆をめぐる戦争の背景や平和に関する思想は、非常に複雑な政治的・社会的問題をはらんでおり、そこに被爆体験の継承をどう位置づけるか、どのように平和を実現していくかといった方向性にも違いがある¹⁵。ここから、被爆体験を語ろうとすることはいくつもの困難な側面を有し、考え方の違いが大きな対立につながってしまうのではないだろうか。

その一方で、阪神淡路大震災という出来事は、被爆体験と同じく被災者の人生観に強く影響しているものであるが、まず第一に天災であり、その点ではみな平等に被災者であり、被災者同士が団結しやすい土壌があったといえる。もちろん、行政や市民の防災・減災対策や住宅の密集など政治的・社会的問題も大きく関係はしているが、「これからは行政も市民もしっかり防災・減災を行っていくべきだ」という意識はほぼ全員が一致して共有する考えだといえる。そのためには何をすべきかという方向性も比較的明確である。個人レベルであれば日頃から避難訓練や備えをしておく、行政レベルでは防災・復興に関する予算の整備や耐震工事の促進など、実際に取り組むことができるかどうかは別にしても、少なくとも進むべき方向性に対立の余地は少ないといえる。もちろん先述したように、公的な立場でない語り部は、そのような防災・減災を強く意識しているわけではなく、助け合いの大切さや人生訓のようなものに重点を置いている。ただ、だからといって公的な立場の語り部が防災・減災教育的要素が強い語りをする傾向にあることを批判するわけではなく、むしろ認め合っ

¹⁵ 直野章子(2015)『原爆体験と戦後日本 記憶の形成と継承』岩波書店では、被爆体験が日米安保条約の調印などを契機とする平和運動や、原水爆禁止運動の広がりなどその時の政治状況によって平和運動の象徴として提示、利用される一方で、原爆被害への理解もないまま平和の訴えと結び付けられることなどに違和感を覚える被爆者もいることを指摘している。

ている。つまり、語り部が語りの中で防災・減災や行政の政策などに重点を置いて話すかどうかには違いはあっても、対立を生むほど目指している方向性に違いがあるわけではないといえる。

阪神淡路大震災の記憶の継承活動について、公的な立場とそうでない方の語りの傾向の違いや、他の記憶の継承活動の比較からわかる特徴についてここまで述べてきたが、多くの語り部にとって「語り部の後継者不足」は共通して課題だと認識されているといえる。阪神淡路大震災から22年が経過している現在、語り部をされている方が高齢化し、記憶が薄れていく中、今後どのように語り部活動をおこなっていくのか、あるいは別の形であれどのように震災の経験や記憶を受け継いでいくのか（いかないのか）ということは重要な課題である。しかし、現役の語り部の方々の間でも、今後どのように震災の記憶の語り継ぎや継承をしていくべきなのかということについて具体的な案や方針は定まっていないのが現状である。語り部の後継者についても、Sさんのように、幼いころ震災を経験した人や直接の経験者じゃなくともしっかり震災のことを理解した人などに広く門戸開放すべきという人もいれば、Oさんのように幼いころに震災を経験した人は記憶が不正確であるから難しいという人もいる。ただ、その課題点に取り組もうと個人的に尽力されている語り部の方もいる。ボランティア活動に取り組むAさんは「今のうちに書物や展示を残しておくことも大事」ということで、自身の震災時の活動などを本にまとめて出版されている。また、先述の通り、語り部の担い手を広く門戸開放すべきというSさんは、それだけでなく、若者の人材育成に力を入れるべきだということ、他団体のボランティア活動で若者とともに被災地支援活動を行い、若者に対してアドバイスをおこなっている。これは直接の「阪神淡路大震災の記憶の継承」とはズレるものであるが、自身の震災での経験を活かして、その知恵や身につけたスキルを東日本大震災などの被災地支援活動において若者に「継承」し、さらにはこれからの災害に対応できる人材を作り上げていくという点で、体験談を語り継ぐ語り部とは別の形態での「震災の記憶・経験の継承」といえるのではないかと考える。

以上の分析をまとめると、震災時に公的な立場にあった方の語りは、自助・共助の重要性を強く訴え、震災を経験しての教訓に重点を置いた教育的側面が強いのに対し、公的な立場ではなかった方の語りは、震災の体験を通じて実感した、人の心のやさしさや助け合いが大切であるということ、を共有しようという姿勢があることがわかった。どの方もそれぞれの経験から聞き手にメッセージを発信したいという熱意があることは間違いないが、その発信のスタンスが、聞き手に「教える」なのか、聞き手と「共有する」なのかどちらにより近いということから語りに違いが表れると言い換えることもできるかもしれない。また、震災の記憶や経験を受け継ぐ活動の意義を考えれば、このように異なるタイプの語りがあることは、聞き手にとって多様な側面から震災を考えることができるという点で意義深い。

そして、多くの語り部に共通の問題意識としては、語り部の担い手の後継者不足があげられる。阪神淡路大震災から年月が経過するにつれ、震災を経験した人の数は確実に減り続けていき、たとえ経験した人であっても記憶が薄れていくことは不可避である。先述したSさ

んの考えのように、語り部の担い手を広く門戸開放することも含め、変革を迫られている時期に差し掛かっているといえる。

第三章 さまざまな形での「継承」と若者の参画

第1節 「語り継ぐ」以外の方法で震災の記憶を継承する

第二章では、震災の記憶を経験者の「語り」により継承する活動について考察してきた。震災の記憶や経験を継承するというとき、震災の経験者が震災を経験していない人々に向かって話す「語り」というのが、まず最初にイメージされる継承活動の形なのではないかと思う。

ただ、語りの実践には一定の限界があるとの指摘もある。笠原(2005)は、「聴衆は迫真に迫るその真実の声を自由な創造を加える余地なくただ受動的に聴くしかない。それゆえ『語り』は、『真実』のリアリティをもたらすものの、当事者と非当事者という二つの大きな共同体を生み出してしまう危険性がある」¹⁶と指摘している。

笠原は「語り」によって当事者と非当事者がはっきり区別されてしまう危険性を指摘しているが、経験者が震災について「語る」ことにより、経験していない人々も震災当時のことを学んだり想像できるようになるという点では、むしろ非当事者が当事者に近づくことのできる契機である。ただ確かに、人と防災未来センターの語り部による「語り」は基本的に一方的な講話形式で、聴衆は受動的に話を聞くという構図があり、そこにはなかなか越えがたい溝があるという側面は否めない。

そこで、震災を経験していない人々が少しでも主体的に震災について考えたり行動したりすることができるように、「語り」以外にもさまざまな形での継承活動が存在する。本節では、震災を経験していない人たちも震災を考えるきっかけとなるような空間をつくることや、慰霊碑を巡って震災当時に思いをはせたり被災者の悲しみや痛みを共有するような活動も、一種の「震災の記憶の継承」と捉え、具体的に考察していきたい。第1節では取り組みの詳細や内容について考察し、第2節で主に課題点について考察したいと考える。

(1)追悼式典「1.17のつどい」

1月17日に神戸市役所横の東遊園地にて「1.17」の形に灯籠を並べ、阪神淡路大震災の犠牲者を追悼する式典「1.17のつどい」は、1999年から毎年開催され、テレビや新聞で報

¹⁶ 笠原一人(2005)「声と文字のあいだ[インスタレーション]」[記憶・歴史・表現]フォーラム『いつかの、だれかに 阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想/展 2005冬 神戸』

道される代表的な震災関連の行事である¹⁷。「1.17のつどい」は神戸市のバックアップを受けながらも市民や市民団体が主導して行っている点も特徴であり、現在は特定非営利活動法人「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」が中心を担っている。報道では主に震災発生時刻である5時46分におこなわれる黙とうの瞬間や、遺族へのインタビューなどが取り上げられるため、遺族が犠牲者に鎮魂の祈りをささげる厳粛な儀式としてのイメージが強いかもしれない。だがそれだけではなく、震災を経験していない人々や若者にも参加してもらうような取り組みも行われているのである。

「1.17のつどい」における新たな取り組みの意義や課題点を明らかにするため、現在「1.17のつどい」の実行委員長であり、「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」代表理事を務める藤本真一さん(33歳男性)にインタビューをおこなった。

藤本さんは2014年にHANDS代表となり、2016年から「1.17のつどい」実行委員長を務めている。つまり藤本さんは2度の「1.17のつどい」を委員長として運営したことになるが、藤本さんが委員長になっていくつか新たな取り組みが始められたのだという。これまでの「1.17のつどい」は追悼式典の色合いが濃く、遺族を中心とした閉鎖的な空間になってしまっていたため、藤本さんは、つどいへの参加のハードルを下げてもっといろいろな人に関心を持ってもらおうと考え、新たな取り組みを始めた。代表的なものが「灯籠を並べて作る文字の公募」と「ペットボトル灯籠」である。

文字の公募とは、例年灯籠を並べて作っている「1.17」の数字に加え、何らかのメッセージや言葉を灯籠で作ろうという試みで、その言葉を公募することにした。2016年は「未来1.17」、2017年は「1995 光 1.17」という言葉が選ばれた。藤本さんの狙いは、文字を公募するという企画によってイベント開催前からマスコミの注目を集め、それによって以前より多くの人の関心を引くということだった。藤本さんによると、新聞のアンケートによれば2016年の「1.17のつどい」参加者のうち4.5割が初参加だったという。

また、「ペットボトル灯籠」の試みとは、これまで灯籠に使用していた竹筒に代わって一部ペットボトルで作った灯籠を導入したものである。竹筒よりも安価なうえに、防災イベントなどで子どもと一緒に制作することで、震災を経験していない世代の関心をよび、参加を進める狙いがある。藤本さんはそのほかにも、大学生にボランティアの協力や参加を要請するなど、若者や子供の参加を促進することに積極的に取り組んでいる。

また、「1.17のつどい」に類似した追悼式典として、「1.17KOBEに灯りを」という追悼行事が1999年から毎年1月17日にJR新長田駅前で行われている。「1.17KOBEに灯りを in ながた実行委員会」が実施しており、この行事においても子どもや若者の参画に取り組んでいる。灯りに使用するろうそくは子どもたちとともに作成し、作成前には実行委員が子どもたちに向けて「阪神・淡路大震災のこと」「防災の心がまえ」「ろうそくつくりの意味」

¹⁷ 神戸新聞 NEXT(2016/12/20)「震災語り継ぐ「1.17のつどい」概要発表」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201612/0009779839.shtml> (2017/11/13 閲覧)

を説明し、震災の記憶や知恵を継承している。その他にも、黙とうの号令や追悼の言葉を大学生が述べるなど、若者へのバトンタッチを試みている¹⁸。

震災を経験していない神戸市民は2013年時点で約42%であり、2021年には5割に上るとみられている¹⁹。そうしたなかで、「1.17のつどい」の場を遺族に限らず震災を経験していない世代にも参加してもらえようようなオープンな場にしていくことは、「震災の記憶の継承」の観点から意義深いものであるといえる。

「1.17のつどい」における若者・子ども世代の参画は、「記憶の継承」といっても、前章で分析した語り部による「語り」のように、震災経験者が震災当日の体験談や教訓を経験していない人々に語る、といった直接的な継承とは異なる。震災を経験していない人々が、「1.17のつどい」という場を共に作り上げていくことや、興味をもって会場に足を運ぶことによって、震災を経験した人々とともに「犠牲者を悼む」「あの日に思いをはせる」「震災について考える」などのさまざまな「場の共有」「思いの共有」をおこなっているといえるのではないかと考える。

新たな取り組みの意義について、藤本さんは

「そういうのが（新たな取り組みが）こつこつと積み重なって、だから1.17当日にどうこうじゃない、そういういろんなお手伝いを通じて、なんか思い出すきっかけ、子どもにこんながあったんやでって話しかけられるような機会があって、その中心が1.17のつどいであったり団体の存在であればええんちゃうかな」と語る。

つまり、藤本さんのねらいは、「1.17のつどい」に関するさまざまな活動を介して、少しでも震災を考え、携わるきっかけができたり、いろいろな場面で経験者が子供に話してあげる機会が生まれたりすることにある。言い換えれば、間接的ながらも「震災の記憶の継承」の輪を広げていくような目的があると考えられる。

これらの取り組みの意義深い点として、震災を経験していない人々も主体的に関わることができるという点である。運営ボランティアとして式典をつくりあげる、ペットボトルで灯籠を作る、式典に参加して祈りをささげる、募金する、アクションの大小はさまざまであるが、自ら何かしらの行動を起こして「1.17のつどい」に関わることによって、震災について本で読んだり人の話を聞くよりも深く実感を伴って、震災の記憶に触れたり考えたりすることのできる可能性がある。

(2)震災モニュメント交流ウォーク

震災を経験していない人々も主体的に参加できる「震災の記憶の継承」行事として、震災

¹⁸和田幹司（2016）『グレーター真野の町から -震災21年の報告-』友月書房、pp.71-76

¹⁹神戸新聞NEXT データで見る阪神淡路大震災 震災から20年「震災を経験していない」2021年には5割に」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/p12.shtml>（2017/11/13閲覧）

で亡くなった人を弔う慰霊碑や震災モニュメントを歩いてめぐる「震災モニュメント交流ウォーク」がある。

このイベントが始まったきっかけは、先ほども言及した堀内正美氏（俳優、「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」前代表）が記者とともに神戸市内などにある震災慰霊碑の場所をまとめた「震災モニュメントマップ」を作成したことから始まった。第一回震災モニュメント交流ウォークは、1999年1月16日夜から17日の明け方にかけて、三宮の東遊園地に向かって東と西から震災モニュメントを巡って歩く2コースで行われた²⁰。

現在は、先述の特定非営利活動法人「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」が主催する「震災モニュメント交流ウォーク」が年に一回、「ひょうご安全の日推進県民会議」が主催する「1.17 ひょうごメモリアルウォーク」が毎年1月17日一回、それぞれおこなわれている²¹。

筆者は、2017年10月15日開催の「震災モニュメント交流ウォーク」に参加した。今回は、神戸市東灘区のモニュメントを巡るコースで、6か所にある慰霊碑やモニュメントを巡った。10時30分に六甲ライナー魚崎駅に集合したあと、魚崎わかばサロン、住吉宮町公園、茶屋地区会館前地藏尊、常住山阿弥陀寺、東灘区役所横、コープこうべ生活文化センターにあるモニュメントや慰霊碑を順番に歩いてまわった。参加者は約20名で、その多くが被災者、または震災遺族であった。新聞記者も3名同行していた。それぞれの箇所では、慰霊碑を管理する施設の方や、被災者である参加者がモニュメントについて説明したり、モニュメントにまつわる震災の話をするなどして当時に思いをはせるとともに祈りをささげた。モニュメントの終着点であるコープこうべ生活文化センターでは、昼食休憩をとったのちに、第二章で紹介した人と防災未来センターの語り部であるMさんの講話がおこなわれた。講話の後に、半分程度の参加者がウォークに参加しての感想や震災に対する思いを述べ、解散は15時頃であった。

この行事はどのように「震災の記憶を継承」しているといえるのだろうか。震災を経験していない立場から考えると、まず第一に神戸という町に染み付いた「震災の記憶」を実際に歩きながら体感できるということである。慰霊碑の前では、それにまつわる震災の話を聞きながら、その慰霊碑に祀られている犠牲者の方々に向かって祈ることができるため、不特定多数の震災犠牲者に向かって祈るよりも、よりリアルに震災の記憶や亡くなった方の悲しみに触れながら思いをはせることができる。

また、ウォークの道中では、当時を知る被災者の方が「この公園ではみんなテントを張って避難生活していた」「このあたりにはたくさん仮設トイレが並んでたんよ」というよう

²⁰ 山崎一夫(2002)「震災モニュメントのマップとウォークの活動を通じて」神戸大学<震災研究会>編『阪神大震災研究 5 大震災を語り継ぐ』神戸新聞総合出版センター

²¹ 神戸新聞 NEXT(2016/1/17)「震災「メモリアルウォーク」 4500人思い胸に」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201601/0008731902.shtml> (2017/11/15 閲覧)

に、震災当時の街の様子を教えてください。普段よく見知ったつもりになっている街が、震災当時はどうなっていたのかを想像することができ、そこから年月を経て今のきれいな街があるのだと気づくことができる。これは、第二章で紹介した語り部の A さんの「修学旅行生が来た時に、みんな神戸がきれいな街になってよかったっていうから、こういう話したげんねん。(中略) 二重ローンが、払い続けて、やっと終わったか終わらないか 20 年たったのが今の神戸や。そういうこと分かったうえで、いい街になったということ、わかってほしい」という思いと通じるものがある。A さんは昔の神戸の街並みを映した写真を見せて、現在の街と比較することでそのことを伝えようとしていたが、震災モニュメント交流ウォークでは実際に街を歩きながら経験者に話を聞いて想像することができる。

これらの取り組みは、もともと震災の犠牲者を弔う意味合いが大きかったものでもあるが、震災を経験していない人々にも震災の記憶を継承する活動として実践されているものである。岩崎(2008)は、語りによる継承に一定の限界があることに言及したうえで、新たなミュージアム活動の実践例を紹介している。例えば、展示室などで来館者が震災の体験記や詩を朗読するという試みは、震災を経験していない者も朗読を通して震災の記憶に主体的に関わることで、被災者の悲しみや苦しみをまるごと共有することはできなくとも、それぞれに少しずつ〈分有〉することができるのではないかと述べている²²。

岩崎の言う〈分有〉という言葉の意味は、震災を経験していない人が、いかに被災者から話を聞いたり勉強したり想像を働かせたとしても、被災者と同等に苦しみや悲しみを理解することは難しいことを前提として、経験していない人が主体的に震災の経験や記憶に触れようと行動することで、少しでもそれぞれの形で震災の記憶を自分の中に取り込み、自分なりの理解や未来の行動につなげていく実践である、と解釈できるのではないかと考える。

本節で紹介した「1.17 のつどい」や「震災モニュメント交流ウォーク」もまさに、震災を経験していない人々が行事の開催を手伝ったり、被災者とともに慰霊碑を巡って歩くことなどによって主体的に関わり、震災の記憶を〈分有〉していく取り組みだといえる。

第二章で考察した「語り」による継承も、震災の記憶の〈分有〉といえるが、震災を経験していない聞き手は、どうしても受動的に経験者の話を聞いてしまう側面があるのに対し、本章で紹介した取り組みは、震災を経験していない人が主体的に参加することができ、またそこでどのように行動するのかも、比較的自由的な形でそれぞれの参加者にゆだねられている点も注目すべきポイントである。というのも、震災の経験者の数が減っていき、神戸市民の 5 割近くが震災を経験しておらず、震災の記憶の風化が問題となっている中で、徐々に震災を経験していない人が行事の担い手となっていく必要がある。そのためには、今の段階

²² 岩崎信彦 (2008)「悲しみは伝えることができるか？」岩崎信彦、田中泰雄、林勲男、村井雅清編『災害と共に生きる文化と教育』pp.20-22、昭和堂

から少しずつ若者世代など経験していない人々が震災関連行事に関わることが重要であるといえる。

第2節 課題点と展望

第1節では、「1.17のつどい」と「震災モニュメント交流ウォーク」が、震災を経験していない人が主体的に関われる「震災の記憶の継承」行事であるということ述べた。だが当然のことながら、成功している側面ばかりではなく多くの課題点が存在している。第2節では、これらの取り組みや行事の課題点と展望について考察していく。

「1.17のつどい」実行委員長の藤本さんは、若者や子供を参画させることに積極的に取り組んでいるが、必ずしも明るい展望を持っているわけではないことがインタビューから明らかになった。筆者が「1.17のつどい」の課題点と展望をおたずねした。

「後継者は今のところいない。まあ、どこもそうだよ。とりあえず俺が死ぬまでやるしかない（中略）もちろん若い子が実行委員長をかわるがわるやってくれればいいけど、たぶん無理そう」

と話し、大学生はボランティアとして手伝いはしてくれるものの、就職などで神戸を離れ、団体の一員などとして長く活動してくれる人は少ないという。

前章の語り部活動においても、高齢化や高齢者不足が課題点として挙げられたが、同じことが追悼行事の運営にも当てはまる。「1.17のつどい」は阪神淡路大震災の追悼行事としては最大規模のものであり、現在の運営主体である「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」の前代表である堀内正美氏から、30代の藤本さんに引き継ぎが成功した²³ことで、当分は存続するとみられる。だが、そのほかの地域団体や自治会が行ってきた追悼行事は震災20年などを区切りに相次いで取りやめになっている。その多くが役員の高齢化や後継者の不足によるものである。神戸市が2013年に行った地域組織基礎調査(2158団体が回答)によると、自治会など地域団体代表者の年齢は70歳以上が39.4%であり、震災が起きた1995年の22.5%と比べ、倍近く増えたという²⁴。

震災関連行事の担い手として若者を取り込むためには、藤本さんの取り組みのように、震災を経験していない人々も参加しやすい土台を作り上げ、地道ながらも子どもや若者がイベントに関われるような機会を積み上げていくことが必要である。ただ、藤本さんがおっし

²³ 神戸新聞 NEXT(2014/7/19)震災20年 伝えるということ 第二部(10)「転換期 動き出す若者への継承」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/rensai/201407/0007158701.shtml> (2017/11/13 閲覧)

²⁴ 神戸新聞 NEXT(2016/01/16)「追悼行事、相次ぐ取りやめ 関係者高齢化で限界」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201601/0008726398.shtml> (2017/11/13 閲覧)

やっていた、学生など若者がボランティアや参加者として関わることはあっても、就職等でもその後も長く活動することは少ないという問題点がある。ボランティアとしてかかわった学生の中から後継者が発掘されていくことが理想ではあるが、例えばいくつかの大学の震災ボランティアサークルと連携し、学生サークルのメンバーが「1.17 のつどい」実行委員会を中心的に担っていくようなシステムを時間をかけて作っていく必要があるかもしれない。

また「震災モニュメント交流ウォーク」の課題点としては、震災を経験していない若者の参加者が少ないという点である。筆者が参加した震災モニュメント交流ウォークでは、参加者約 20 名のうち、震災を直接経験していない参加者は筆者含め 2 名程度であった。この行事が始まった頃と比べると開催頻度も参加者数も減少している²⁵が、参加者数が少ないということ自体は、参加者同士の距離が近くなり、コミュニケーションがむしろ活発に行われるという点では必ずしもデメリットではない。ただ、参加者のうち震災を経験していない人の割合が少ないというのは、「震災の記憶の継承」という観点からみれば課題点である。

また、若者の参加者の割合が少ないということでもますます若者の参加のハードルが高くなっているのではないかと感じる。筆者自身も、被災者の方から当時の話などを聞くことができたのは大変勉強になったのだが、震災で家族を亡くした方が涙ながらに当時のことを語り、それに呼応するように涙するほかの遺族の方々を見ていると、「自分はここにいていいのだろうか」と複雑な気分になったことも確かである。

ただ、遺族や被災者の方の立場に立てば、この震災モニュメント交流ウォークという行事は、若者に「震災の記憶を継承」という目的よりも、犠牲者を追悼するとともに遺族同士で交流するという目的のほうが重要であるといえるかもしれない。この行事取材した新聞記事においても「震災でわが子を亡くした遺族らは「やっぱり助け合いが大切。人って優しいよ。亡き息子のためにも頑張って生きたい」などと語り、励まし合った」²⁶とあった。この行事に参加することで震災で亡くなった大切な人を弔い、同じ立場の遺族と励ましあいながら生きる活力につなげていくという意義が読み取れる。その点に注目すれば、確かに若者の参加は歓迎されるものであるが、躍起になって若者を呼び込むというよりも、遺族・被災者が震災を思い起こし交流する場を小規模ながらも残していくことがこの行事の一番の目標であるといえる。そして、参加した少数の若者が、被災者の方と交流しながら見識を深める場となればなお意義深いものとなる、と捉えることもできる。

とはいえ、行事を存続させるためには、やはり担い手・参加者の高齢化という問題に向き合うことは避けられない。その点では語り部活動や「1.17 のつどい」と共通している。

現在、「震災モニュメント交流ウォーク」を主催しているのは先述の認定 NPO 法人「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」であり、前代表の堀内氏や現代表の藤本さんを

²⁵山崎一夫(2002)「震災モニュメントのマップとウォークの活動を通じて」神戸大学<震災研究会>編『阪神大震災研究 5 大震災を語り継ぐ』神戸新聞総合出版センター

²⁶ 神戸新聞 NEXT (2017/10/16)「阪神・淡路大震災の慰霊碑めぐり 神戸・東灘で遺族ら」

<https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/201710/0010649667.shtml> (2017/11/15 閲覧)

中心として運営されているため、当面は存続するとみられるが、藤本さんが危惧していたように HANDS の後継者が生まれなければ、この行事も自然となくなるとみられる。また、先ほど遺族や被災者のためにも存続すべき行事であると述べたが、被災者の中でもこの行事に参加しているのは高齢者が中心である。行事を長く続けるためには、被災者の中でも比較的若い 30~50 代の人々が参加することで、よりイベントが活気づくと思われる。

以上のことから、語り部活動と同様に、震災関連行事の担い手が高齢化もしくは後継者が不足しているという問題点があげられた。今後の展望として、若者や震災を経験していない人々が積極的に参加し、そこから担い手が生まれてくることが理想であるが、まずは震災に関心があると思われる防災系学部の学生や被災地ボランティアをおこなっている学生団体・サークルと連携することが重要であり現実的であると思われ、現に藤本さんが取り組んでいることの一つでもある。

また、どうしても年月が経過してくるにつれ、開催する必要はあるのかといった意見がみられることもある。2015 年度に実施された神戸新聞のアンケートでは、震災追悼行事について「続けるべきだ」が 42%で、「区切りをつけてやめるべきだ」の 22%の倍近くみられるものの、一定数の人々が震災 20 年を過ぎてやめるべきだと考えていることが伺える²⁷。

しかしながら、震災関連行事は震災を思い起こし、未来に向けてそれぞれが何らかの行動を起こす重要な機会であることは間違いない。上記のアンケートでも、追悼行事に参加するという人が、参加する理由としては「震災を思い起こし、記憶を胸に刻みたかった」が 53%と最も多く、「亡き人をしのび、冥福を祈りたかった」の 29%を上回っている²⁸。このことから、追悼行事を行う意義は、犠牲者の冥福を祈ることにとどまらず、震災を思い起こし、震災の記憶を継承していく目的が大きいということが伺える。震災を経験していない人々にとっても、日本各地で災害が多発する中で、神戸の街の記憶に触れたり、過去の震災を思うことで何かしらの未来の行動につなげていくことは意義深いといえるのではないだろうか。

終章 まとめと結論

この論文では、阪神淡路大震災の記憶の継承をめぐる活動を取り上げ、その具体的内容を紹介したうえで、考察と分析を加えてきた。

第二章では人と防災未来センターの語り部について、第三章では追悼式典「1.17 のつどい」と「震災モニュメント交流ウォーク」についてその具体的内容をインタビューもふくめて記述した。そして、それぞれ意義や課題点を考察してきた。終章ではこれまでの考察を踏

²⁷神戸新聞 NEXT (2016/1/14)「「阪神・淡路」追悼行事 継続望む 42% 本誌調査」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/inoritsugu/201601/0008720585.shtml>(2017/11/15 閲覧)

²⁸神戸新聞 NEXT (2016/1/14)「震災追悼行事 継続派 6 割「協力したい」本誌調査」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/inoritsugu/201601/0008720581.shtml> (2017/11/15 閲覧)

まえ、震災の記憶を継承する意義はなんなのか、若者や震災を経験していない人々にどのように伝えていくのか、あらためてまとめていきたい。

第二章で紹介した「人と防災未来センター」の語り部の人々の語りからは、語りの内容や「伝えたい」ことの内容の傾向を検討した結果、避難訓練や自助の重要性を伝える防災教育的語りと、自らの体験談から導き出された助け合いの大切さや思いやりの大切さを伝える人生訓的語りが見られることが分かった。

「語り」以外の形での震災の記憶の継承としては、第三章で取り上げた「1.17 のつどい」や「震災モニュメント交流ウォーク」等の震災関連イベントがあった。そこでは、ただ犠牲者を追悼するだけにとどまらず、震災を経験していない人々が各々の形で主体的に関わり、震災を思い起こすことで自分なりの気づきを得ることができるといえる可能性があるような工夫がされていることを指摘した。

以上のような考察のなかで、震災の記憶の継承活動の考察や分析を通して、なぜ震災を語り継ぐのか、伝える意義は何なのか、という本論文の主な問題提起に対する結論として、大きく三つの方向性の意義や目的が浮かび上がってきた。

一つには、教訓を受け継ぎ、将来の災害に備えるという減災・防災教育的意義である。第二章でみたように、防災教育的意義が顕著だったのは、震災時公的な立場にあった語り部の方の語りであり、また語り部の講話がそもそも中高生を対象として行われる場合が多く²⁹、学校教育の一環としての防災教育を志向する傾向が高いことは十分に考えられる。また、第三章で紹介した追悼式典「1.17 のつどい」においても、行事そのものの中心的意味は犠牲者の追悼であり、参加者が何を感じ取り何を考えるかはそれぞれにゆだねられていて、防災・減災の観点を直接含んでいるわけではない。しかし、式典における神戸市長のあいさつでは防災について語られたり、行事と並行して防災訓練が行われたりするなど、行事をきっかけに防災・減災を考えていこうという意識はやはり含まれているといえる。市長のあいさつの言葉には、「自らの経験を活かし、防災・減災・安全・健康などの分野で、他の都市や地域に貢献し続ける都市であり続けます」³⁰とあるように、日本各地で震災が多発する中で、大きな災害を経験した神戸がその経験をほかの都市の災害においても活かし、防災・減災分野でリードしていかなくてはならないという強い意識が感じられる。

二つ目は、被災者の思いを「共有」することで、人の優しさや命の大切さを学び、日々の生活を大切にしていこうという、心の側面における道徳的意義である。この意義が顕著だったのは、一般的な被災者の語り部の語りにおいてであった。自らの体験談のなかで人の優しさや助け合いの大切さに触れたエピソードを話すことで、周りの人を大切にしてほしいと

²⁹ 第二章で紹介したように、人と防災未来センターの来館者のうち、学生（小・中学生、高校生、大学生）が62.1%である。人と防災未来センター(2017)『人と防災未来センター 平成28年度年次報告書』より。

³⁰ 神戸市公式ホームページ「阪神淡路大震災1.17のつどい 追悼のことば」

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/mayor/speech/speech1.17.html> (2017/12/3 閲覧)

いうメッセージを伝え、聞き手が何かを感じ取ることを期待している方が多かった。「1.17のつどい」や「震災モニュメント交流ウォーク」においてもこの傾向が強いといえた。それぞれの行事では、参加者に対して震災や防災・減災について学ぶようはっきり要求するのではなく、追悼の空間を共有し、被災者と交流する中で、参加者がそれぞれ何かしらの気づきや考えを深めることを期待しているといえるだろう。

三つ目には、神戸という街のアイデンティティの共有である。神戸の街がどのような悲しみを乗り越えてきたのか、どうやって復興してきたのかということを伝えることで、神戸の乗り越えてきた傷やその歩みを共有し、神戸の人々の誇りや結束につなげているといえる。震災から22年以上の年月が過ぎた今でも、神戸が阪神淡路大震災を経験し、乗り越えてきた街であるという意識は非常に強い。例えば、犠牲者の追悼と復興のシンボルとして始まった神戸ルミナリエは、財政難で開催が危ぶまれながらも、続けてほしいという要請は根強く、寄付金を募りながら2017年現在も開催されることが決定している³¹。最近では、2017年12月に「めざせ！世界一のクリスマスツリーPROJECT」としてメリケンパークに巨大クリスマスツリーが設置された。このプロジェクトは、そら植物園株式会社が実施し、代表の西畠清順さんは、このプロジェクトを神戸で開催することに阪神淡路大震災の鎮魂の意味を込めていると話している³²。直接震災とは関係ないイベントであっても、象徴的に震災に対する祈りや思いを込めていることは、神戸の阪神淡路大震災に対するアイデンティティをうかがわせるものであるといえる。一方で、このプロジェクトに対しては、巨木がもともと植わっていた富山県から引き離して神戸に移植しわずかな期間だけ飾り立てることが「鎮魂」なのかという違和感や、「鎮魂」「復興」を商売に利用しているといった批判の声が上がっている³³。この批判の声からも、神戸の人々が震災に対して抱いている特別な思いや被災者の複雑な心情がうかがえる。

以上のことから、阪神淡路大震災の記憶を継承する意義には、防災・減災における意義、道徳的意義、神戸のアイデンティティ共有の意義があると結論付けられる。

また、これまで紹介してきたように、震災の記憶を継承しようと活動されている語り部の方々や震災行事の主催者は、震災という出来事や経験を忘れずに伝えるということにとどまらず、聞き手や参加者が自分なりに震災のことを考えたり思い出したりすることを望んでいる。このことは、阪本・矢守(2010)が、「我々が記憶の継承ということを考える場合、記憶を刻む場が、記憶の想起を促す場となっているのかということが重要である」³⁴と述べ

³¹ 神戸新聞NEXT (2017/2/3付)「神戸ルミナリエ「継続への力に」募金贈呈式」<https://www.kobe-np.co.jp/news/shakai/201702/0009885438.shtml> (2017/12/3閲覧)

神戸ルミナリエ公式ホームページ <http://kobe-luminarie.jp/> (2017/12/3閲覧)

³² そら植物園公式ホームページ <http://www.soratree.jp/message.html> (2017/12/3閲覧)

³³ 毎日新聞(2017/12/12付)「被災地・神戸 「鎮魂」を大義名分にした「商魂」が、SNSで大炎上」<https://mainichi.jp/sunday/articles/20171211/org/00m/050/002000d> (2017/12/17閲覧)

³⁴ 阪本真由美、矢守克也(2010)「災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察」

ていることや、第一章で言及した桜井(2008)の「語り継ぐ行為は過去を歴史へと固定化することではなく常に現在へと再活性化することであることを忘れてはならないだろう」³⁵という言葉に通じるものである。つまり、阪神淡路大震災の記憶の継承は、震災という出来事や経験を忘れずに伝えていき、歴史に刻むということにとどまらず、現在を生きる人々が震災の記憶を受け取って、それぞれが新たに想起し考えを深めるなかで、未来に活かしながら受け継がれていくものだけということである。

それでは、震災の記憶の継承にそのような意義が認められたうえで、震災を経験していない人々や若者へ継承していくうえでの課題点と展望はどのようなものだろうか。

課題点については、人と防災未来センターの語り部、「1.17 のつどい」、「震災モニュメント交流ウォーク」、いずれにも共通した課題が見いだせた。担い手の高齢化と後継者不足である。この問題に対して、語り部の方の一部は、震災を経験していない人にも広く門戸を開放し、語り部として育成するべきと話し、「1.17 のつどい」委員長の藤本さんも子供や若者をイベントに参画させる企画を行っている。しかし、今のところ後継者を育成する体制が整っているとは言えない。高齢化で追悼行事等が相次いで取りやめになっている状況について、神戸大・室崎益輝教授は神戸新聞の記事内で「忘れずに伝え続けることが減災の基本。なのに、活動を高齢者に任せきりにしているのが問題だ。行政や住民は、小中学校・高校と連携するなどして、存続させる工夫が必要」³⁶と語っている。小中学生に行事に参加してもらうというのは、行事が存続し活気づくためにも必要なことであるし、その中から将来的に地域の震災関連行事に携わる学生が現れる可能性もある。

そのように参加者として児童・学生を呼び込むことに加えて、担い手の育成により直結する取り組みとして、震災に興味のある大学生や防災関連の学部に通う大学生と連携するのが重要なのではないかと私は考える。大学生がボランティアとして協力するというのは、「1.17 のつどい」においてすでに実践されていることではあるが、実行委員長の藤本さんは若者の協力が就職等により継続しないことを問題視していた。防災系学部の学生に加え、被災地ボランティアをおこなっている学生団体やサークルとも連携したうえで、本格的に学生中心の実行委員会のようなグループを創設するなどの工夫が必要かもしれない。

また、このような若者の参画を人と防災未来センターの語り部活動においても実践するのが望ましいのではないだろうか。毎年多数の学生が防災教育の一環で語り部の語りを聴きに訪れているが、現状では、講義形式での講話であるため受動的な参加にとどまっている。2011年から人と防災未来センター内には兵庫県立大学の防災教育・研究拠点として「兵庫県立大学防災教育研究センター」が設置されているが、基本的に教員の研究室としての利用

地震災害のミュージアムを中心に」『自然災害科学』29.2：181

³⁵桜井厚(2008)「語り継ぐとは」桜井厚、山田富秋、藤井泰編『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』せりか書房、p.16

³⁶神戸新聞 NEXT(2016/01/16)「追悼行事、相次ぐ取りやめ 関係者高齢化で限界」<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201601/0008726398.shtml> (2017/12/3 閲覧)

や学生に対する講義の実施にとどまっており、語り部や展示解説ボランティアの育成には至っていない³⁷。今後はより活発に語り部と学生の交流をおこない、震災を経験したことの無い若者が震災を語るという取り組みを始めることを考えるべきではないだろうか。経験したことの無い若者が語り伝える例として、長崎原爆資料館では、博物館実習において学生が被爆体験を学んだうえで企画展を担当するという取り組みが実施されているという³⁸。以上のように、震災の記憶を次世代に継承するためには、経験者が若者に対して経験を語ることや震災関連行事に参加することだけではなく、若者を語り部や行事の担い手として徐々に育成していくことが必要であると考えられる。そのためには、多くの学生や若者に震災関連行事に参加してもらうことで震災に関心を持つ機会を増やすことに加え、積極的に被災者との交流を図ったり、防災系学部の学生や被災地ボランティアに参加している学生など震災に強い関心があると思われる学生を担い手として参画させることが重要である。

震災から年月が経つにつれ、震災を経験し生々しく記憶している人の数は確実に減少していき、高齢ながらも震災の記憶を受け継ごうと熱心に活動する方々がまだ一定数いる現在のうちに、震災を経験していない人々や若者に対してその知恵や生き方を含めた記憶を受け継ぐことで未来に活かしていくことが、今を生きる私たちに与えられた役割といえるだろう。

謝辞

本論文の執筆にあたって、人と防災未来センターの語り部ボランティアの皆さまと、特定非営利活動法人「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」理事長の藤本真一さんには多大なるご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

<参考文献>

- 渥美公秀(2014)『災害ボランティア 新しい社会へのグループ・ダイナミクス』弘文堂
荒井勤(2017)『あなたにも出来る被災者支援 実践事例集』交友プランニングセンター・友月書房
今井信雄(2002)「阪神淡路大震災の「記憶」に関する社会学的考察」『ソシオロジ』47
岩崎信彦、田中泰雄、林勲男、村井雅清編(2008)『災害と共に生きる文化と教育 <大震災

³⁷ 兵庫県立大学公式ホームページ <http://www.u-hyogo.ac.jp/campuslife/program/bousai/index.html>
(2017/12/4 閲覧)

³⁸ 日本経済新聞 (2012/9/18 付)「原爆の記憶、若者が継承 長崎資料館で女子大生実習」
http://www.nikkei.com/article/DGXNASJC1700C_X10C12A9ACY000/ (2017/12/4 閲覧)

- >からの伝言』昭和堂
- 笠原一人 (2005) 「声と文字のあいだ[インスタレーション]」 [記憶・歴史・表現] フォーラム『いつかの、だれかに 阪神大震災・記憶の<分有>のためのミュージアム構想/展 2005 冬 神戸』
- 木部暢子編(2015)『災害に学ぶ 文化資源の保全と再生』 勉誠出版
- 高野尚子、渥美公秀(2007)「阪神淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察—対話の結びをめぐって—」『実践社会心理学研究』 46.2
- 神戸大学<震災研究会>編(2002)『阪神大震災研究 5 大震災を語り継ぐ』神戸新聞総合出版センター
- 阪本真由美、矢守克也 (2010) 「災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察—地震災害のミュージアムを中心に」『自然災害科学』 29.2
- 桜井厚、山田富秋、藤井泰編(2008)『過去を忘れない 語り継ぐ経験の社会学』せりか書房
- 島晃一、片田敏孝、木村さやか(2010)「被災経験の風化と災害文化の定着過程に関する一考察。」『土木計画学研究/講演集』 41
- 直野章子(2015)『原爆体験と戦後日本 記憶の形成と継承』岩波書店
- 長坂俊成 (2012)『記憶と記録 311 まるごとアーカイブス』岩波書店
- 阪神淡路大震災 1.17 のつどい実行委員会(2015)『阪神淡路大震災 1.17 のつどい 2015 実施報告書』
- 人と防災未来センター (2017)『人と防災未来センター平成 28 年度年次報告書』
- 平和と和解の研究センター 足羽與志子、濱谷正晴、吉田裕編(2010)『平和と和解の思想を尋ねて』大月書店
- 和田幹司 (2016)『グレーター真野の町から —震災 21 年の報告—』友月書房

<参考記事・Web サイト>

- 神戸市公式ホームページ「阪神淡路大震災 1.17 のつどい 追悼のことば」
<http://www.city.kobe.lg.jp/information/mayor/speech/speech1.17.html> (2017/12/3 最終閲覧)
- 神戸新聞 NEXT (2015/1/17 付)「忘れない淡路島の 1・17 野島断層保存館で特別展示」
<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/201501/0007663168.shtml> (2017/12/3 最終閲覧)
- 神戸新聞 NEXT ((2015/1/17 付)「忘れない、東京でも 「阪神・淡路」 写真展を開催」
<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/201501/0007665063.shtml> (2017/12/3 最終閲覧)
- 神戸新聞 NEXT(2017/1/17 付)「震災の教訓、次世代へ伝えたい 神戸大で追悼式典」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/22/201701/0009838356.shtml> (2017/12/3 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT (2015/8/18 付)「復興 次代へ」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/jidai/img/201508.pdf> (2017/12/3 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT(2016/12/20 付)「震災語り継ぐ「1.17 のつどい」概要発表」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201612/0009779839.shtml> (2017/11/13 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT データで見る阪神淡路大震災 震災から20年「震災を経験していない」2021年には5割に」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/p12.shtml> (2017/11/13 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT(2016/1/17 付)「震災「メモリアルウオーク」 4500人思い胸に」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201601/0008731902.shtml> (2017/11/15 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT(2014/7/19 付) 震災20年 伝えるということ 第二部(10)「転換期 動き出す若者への継承」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/rensai/201407/0007158701.shtml>

(2017/11/13 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT(2016/01/16 付)「追悼行事、相次ぐ取りやめ 関係者高齢化で限界」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/21/201601/0008726398.shtml> (2017/11/13 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT (2017/10/16 付)「阪神・淡路大震災の慰霊碑めぐる 神戸・東灘で遺族ら」

<https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/201710/0010649667.shtml>(2017/11/15 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT (2016/1/14 付)「「阪神・淡路」追悼行事 継続望む 42% 本誌調査」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/inoritsugu/201601/0008720585.shtml>(2017/11/15 最終閲覧)

神戸新聞 NEXT (2016/1/14 付)「震災追悼行事 継続派 6割「協力したい」本誌調査」

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/inoritsugu/201601/0008720581.shtml> (2017/11/15 最終閲覧)

神戸ルミナリエ公式ホームページ <http://kobe-luminarie.jp/> (2017/12/3 最終閲覧)

そら植物園公式ホームページ <http://www.soratree.jp/message.html> (2017/12/3 最終閲覧)

日本経済新聞 (2012/9/18 付)「原爆の記憶、若者が継承 長崎資料館で女子大生実習」

https://www.nikkei.com/article/DGXNASJC1700C_X10C12A9ACY000/ (2017/12/4 最終閲覧)

人と防災未来センター公式 HP

http://www.dri.ne.jp/material/material_stories (2017/12/10 最終閲覧)

兵庫県立大学公式ホームページ

<http://www.u-hyogo.ac.jp/campuslife/program/bousai/index.html> (2017/12/4 最終閲覧)

毎日新聞(2017/12/12 付)「被災地・神戸 「鎮魂」を大義名分にした「商魂」が、SNSで大炎上」<https://mainichi.jp/sunday/articles/20171211/org/00m/050/002000d> (2017/12/17 最終閲覧)

<インタビューに協力してくださった方々>

人と防災未来センター 語り部ボランティアの方々 (A.I さん、H.Y さん、H.U さん、M.H さん、N.M さん、O.Y さん、S.M さん、T.S さん)

「1.17 のつどい」実行委員長・特定非営利活動法人「阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り (HANDS)」理事長 藤本真一さん